

大宰府条坊跡 VIII

— 第133次調査 —

1995

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡Ⅷ 正誤表

ページ	行	誤	正
目次	30	遺構「配置」図及び別表	別表
13	8	坏 a (1) 口径約18.0cm。	坏片(1) 口径約18.0cm。

大宰府条坊跡 VIII

— 推定朱雀大路周辺の調査(1) —

1995

太宰府市教育委員会

序

本書は、集合住宅建設に伴い、太宰府市が平成4年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。調査地周辺は、大宰府政庁の中軸線のほぼ南延長上にあり、調査前から、朱雀大路に関係する遺構の検出が予想されていた所であります。

今回の調査では、朱雀大路の西側溝とみられる奈良時代及び平安時代の溝が検出され、貴重な資料を得ることができました。律令によると、古代大宰府には「蕃客・帰化・饗宴」という古代日本の対外的な窓口としての貴重な役目がありました。遣唐使が行き来し、時には外国の使節や商人が訪れるという、国際色豊かな街であった大宰府のメインロードがこの朱雀大路です。現在の街並みから、朱雀大路を含めた往古の街の様子を窺うことはできませんが、今回の発掘調査等により、徐々に大宰府条坊のなかの様子が明らかになりつつあります。

ささやかな冊子ですが、本書が文化財に対する理解と認識を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び整理に参加されました作業員、補助員の方々にお礼を申し上げます次第であります。

平成7年3月

太宰府市教育委員会
教育長 長野 治 己

例 言

1. 本書は、大宰府条坊跡第133次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査地点は、太宰府市大字南字芝原323の1で、調査対象面積は約549㎡、調査面積は117㎡である。調査は、平成4年10月5日から10月27日にかけて実施した。
3. 調査は大宰府市教育委員会主任技師の狭川真一と補助員の井上信正（現技師）が担当した。
4. 遺構の実測図作成及び写真撮影は、上記担当者及び河田聡が行い、調査地の空中写真は、(株)空中写真企画（代表 檀陸夫）が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系によっている。したがって報告書中に示す方位はすべて座標北（G.N.）である。
6. 本書に掲載される遺構番号は以下の要領で理解される。



なお本書中では、遺跡略称の「条」を基本的に省略している。

7. 遺物の実測図作成及び浄書は井上が、拓本は境一美、鶴味加代子が行った。また遺物の写真撮影は狭川、井上が行った。
8. 本書に使用した土器・陶磁器の分類は、基本的に『大宰府条坊跡Ⅱ』付編掲載のものによる。また瓦の分類は、九州歴史資料館の分類(石松好雄・高橋章「大宰府出土の瓦について」『研究論集』4 九州歴史資料館 1978年)によっている。なお陶磁器の選別記録作業は、山本信夫の助言を得て、井上が行った。
9. 遺物の保存処理作業は、鉄製品の応急処置を補助員の山中幸子が行った。
10. 本書の執筆および編集は、狭川の助言を得て、井上信正が担当した。

目 次

I. はじめに	1
II. 調査経過	4
III. 調査の概要	6
(1) 層位について	6
(2) 検出遺構	6
(3) 出土遺物	13
IV. 小結	35
遺構「配置」図及び別表	40
PLATE	47

I. はじめに

玄界灘を挟んで大陸に面した北部九州一帯は、その地理的環境により、日本における文化・外交の窓口として歴史的に重要な役割を果たしてきた。古くは縄文時代から朝鮮半島と交流があったことが知られるが、特に北部九州の地理的重要性が認識されたのは、稲作文化を受容した弥生時代以降であろう。その後各時代を通じて時代を代表する人物が往来し、さまざまな内外の物品が行き来した当地は、異文化と接する機会が多く、国内における文化の発信地的な役割を担っていたといっても過言ではなからう。北部九州が、国内においては西辺の一地方であるにも関わらず、歴史的イベント・事象の多いのも頷けるところである。

大宰府市は、北部九州を代表する平野の一つ福岡平野の南西最深部に位置する。古代九州の一大拠点といわれる当市一帯は、弥生時代から古墳時代においては、大規模な集落が展開した福岡平野と筑後平野の狭間にあり、比較的小規模な集落が形成されたに過ぎなかったようである。二つの大勢力に挟まれ、干渉地的な様相を呈していたと考えられる当地が、その後、大きく転換するきっかけとなった事件が起こる。斉明天皇2年(662)に起こった白村江の戦である。これで唐・新羅の連合軍に大敗した日本は、北部九州を中心とした防衛網の整備にとりかかる。筑紫国はもとより各地に防人や烽が配置され、当市周辺には、防衛網の拠点といえる水城・大野城・基肄城が築造された。こうして、7世紀後半の慌ただしさのなかで歴史の表舞台に登場した当市一帯は、その後大宰府政庁が造営され、そして政庁南面にいわゆる大宰府条坊という古代都市が展開したことで、名実とも九州(西海道)の政治・経済・文化の中心地としての役割を担っていくことになったのである。

大宰府条坊の存在及び研究は、昭和43年に鏡山猛が「大宰府都城の研究¹⁾」を発表したのに端を発している。鏡山説によると、大宰府条坊は南北二十二条(2.4km)、東西各十二条(2.6km)に及ぶものとされ、南は、筑紫野市にまで及ぶ広大なものであったとされる。

大宰府の遺跡発掘調査は、昭和43年に福岡県教育委員会が大宰府史跡調査を開始したのが最初である。大宰府市教育委員会においては、昭和54年度より観世音寺土地区画整理事業における発掘調査を発端として大宰府条坊跡および大宰府に付随する遺跡の調査を続けている。近年では筑紫野市教育委員会においても大宰府条坊跡の調査数が増え、平成7年3月現在では総じて160件を越えている。こうした調査により、大宰府条坊についてのデータがかなり蓄積されてきており、近年こうした成果を踏まえた論考がいくつか発表され、先に鏡山が提示した案を見直す向きもある²⁾。

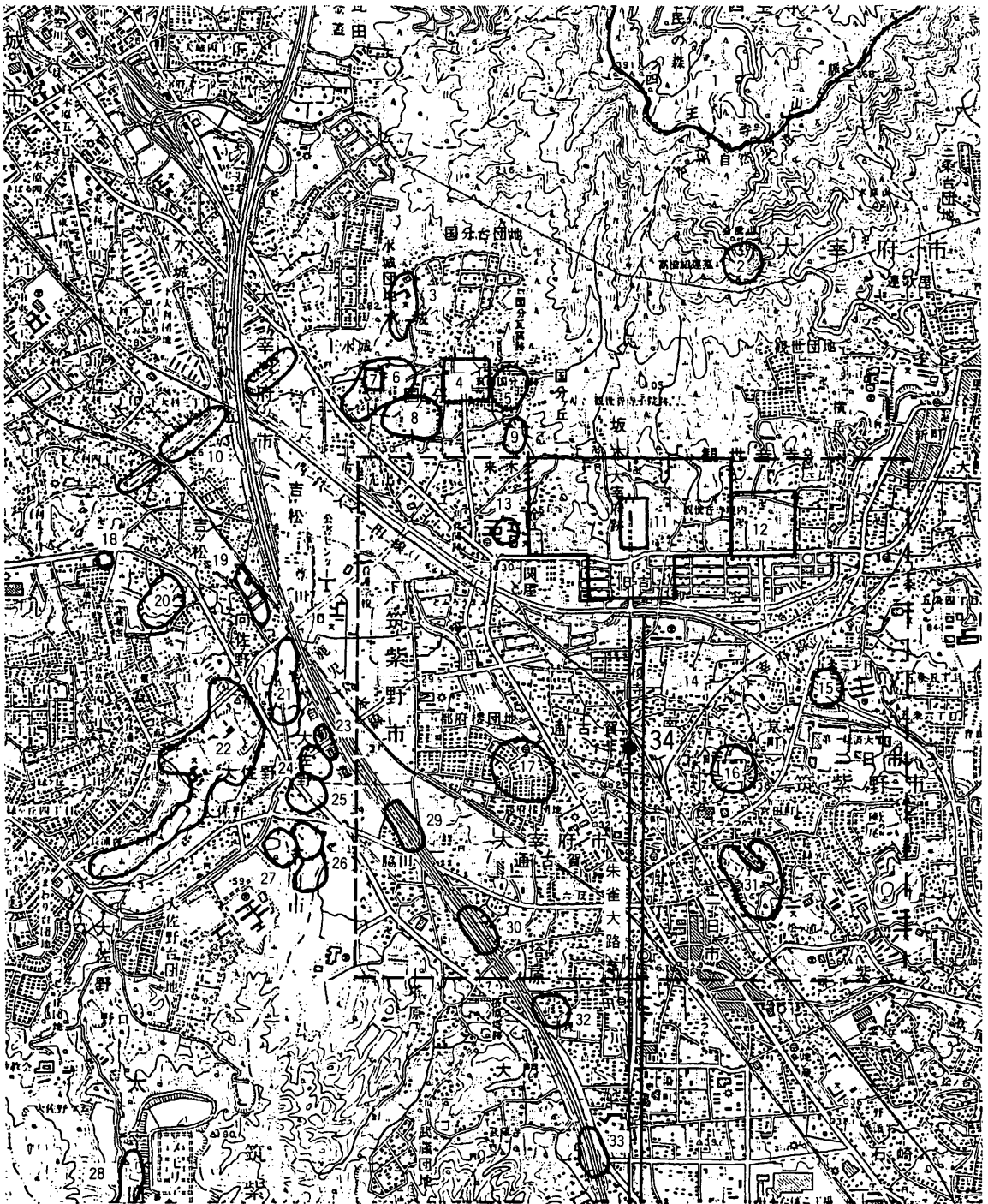


Fig. 1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)

- | | | | | |
|------------|-----------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 大野城跡 | 9. 御笠軍団印出土地 | 17. 市ノ上遺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 33. 道場山遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 10. 水城跡 | 18. 神ノ前竈跡 | 26. 脇道遺跡 | 34. 大宰府染坊跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 19. 原口遺跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 第133次調査 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 12. 観世音寺 | 20. 篠振遺跡 | 28. 野口遺跡 | |
| 5. 辻遺跡 | 13. 遠賀軍団印出土地 | 21. 前田遺跡 | 29. 刺塚遺跡 | |
| 6. 松本遺跡 | 14. 大宰府染坊跡(破線内) | 22. 宮ノ本遺跡 | 30. 唐人塚遺跡 | |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 15. 君畑遺跡 | 23. 難川遺跡 | 31. 峯遺跡 | |
| 8. 千足遺跡 | 16. 般若寺跡 | 24. フケ遺跡 | 32. 桶田山遺跡 | |

今回報告の対象となる大宰府条坊跡第133次調査地点は、大宰府政庁中軸線の延長上にあり、これまでの発掘調査の成果から、大宰府の推定朱雀大路関連の遺構が検出される可能性が極めて高いとされていた地点である。調査の結果、朱雀大路西側溝と考えられる遺構を検出した(133SD010、133SD015)。古代大宰府推定朱雀大路の側溝については、当市及び筑紫野市の発掘調査により他に数例確認されている。

朱雀大路は、古代都市の中央を南北に走る道路で、都市の中核(大宰府では、大宰府政庁にあたる)に通ずる最も主要な道路である。平城京をはじめとする古代都市はこれを中心に都市がほぼ左右対称に展開するのを典型としており、朱雀大路はいわば都市設計の基準と考えられる。

大宰府においては、これまでの発掘調査成果から奈良時代の朱雀大路の幅は約36mと推定されている。今回の報告以外の朱雀大路関連の調査報告は諸事情により遅れているが、古代大宰府の都市設計及び都市景観を復原する上で、朱雀大路についての検討は重要な課題である。今後整理が進み、かつ今後調査事例の増加により、古代都市大宰府の解明がより進むものと思われる。

註1 鏡山 猛『大宰府都城の研究』 風間書房 1968年

註2 石松好雄「大宰府庁域考」『大宰府古文化論叢』 上 1983年

金田章裕「大宰府条坊プランについて」『人文地理』 41-5 1989年

狭川真一「大宰府条坊の復原」『条里制研究』 6 1990年

他

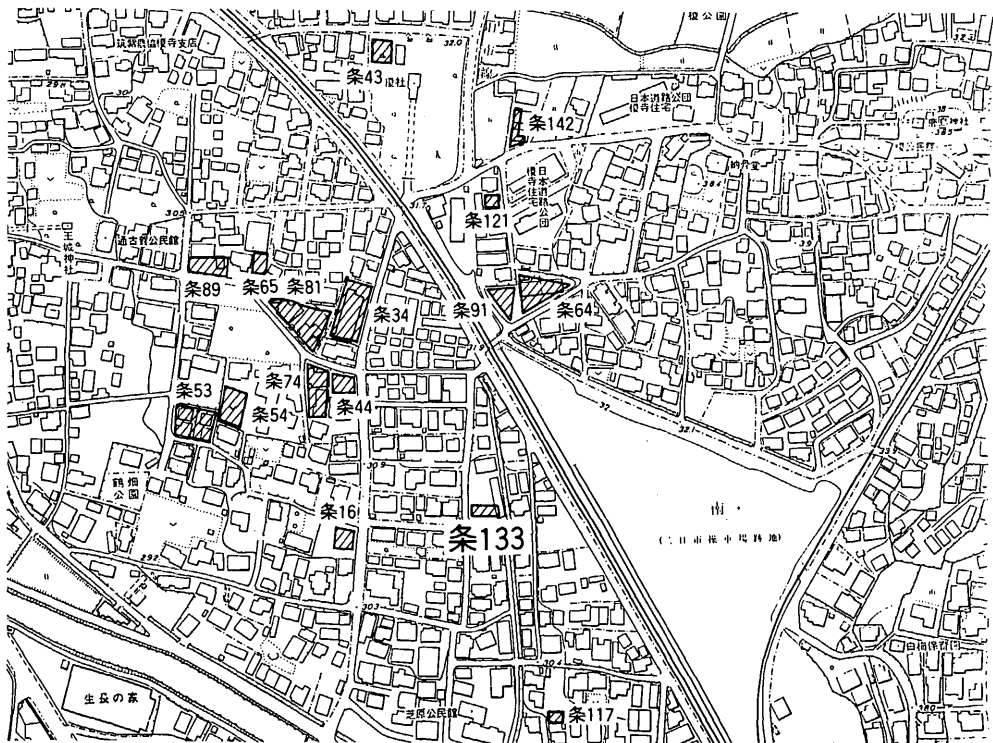


Fig. 2 大宰府条坊跡第133次調査地点位置図 (1/5000)

Ⅱ. 調 査 経 過

当該地において集合住宅建設の話が持ち上がり、協議の結果、発掘調査を実施することになった。当初敷地全体を調査する予定だったが、諸事情から建物が建設される南側に限定して調査を実施し、また排土置き場の関係から東西に分けて調査した。調査は、平成4年10月5日から10月27日にかけて実施した。なお調査に際しては、地権者の牛嶋昭太郎氏の多大なるご協力を得た。

調査を行った平成4年度の体制は、次のとおりである。

調査主体 太宰府市教育委員会

総括 教育長 長野 治己

庶務 教育部長 中川シゲ子

文化課長 佐藤 恭宏

埋蔵文化財係長 高田 克二

文化振興係長 大田 重信

主任主事 岡部 大治

川谷 豊

調査 主任技師 山本 信夫

狭川 真一

城戸 康利

緒方 俊輔（現宮崎県高千穂町教育委員会）

山村 信榮（平成4年7月1日～）

技 師 中島恒次郎

塩地 潤一（現大分市教育委員会）

技師(嘱託) 田中 克子

調査参加者は、次のとおり。（順不同、敬称略）

上原 洋美 内野 絹子 梅津登美子 木村 静子 木村 末子 陶山 小春

陶山よしゑ 田中 幸子 主税 松子 手寫 久子 永川 満香 花牟禮恵子

原 康之 深川加寿子 福島 保子 藤 榮 増野 芳枝 松隈 真理

松田 路子 松本 茂吉 松本 信行 森 由美子 山内アサノ 和田 京子

和田ハマ子 河田 聡 (以上、発掘調査作業員)

山中 幸子 (以上、遺物整理補助員)

井上 信正 (以上、調査補助員)

整理は、平成6年度を中心におこなった。平成6年度の体制は次のとおりである。

総括	教育長	長野 治己
庶務	教育部長	白木 三男
	文化課長	花田 勝彦
	文化財保護係長	高田 克二
	文化振興係長	大田 重信
主任主事		岡部 大治
		川谷 豊
主 事		今村江利子
調査	技術主査	山本 信夫
	主任技師	狭川 真一
		城戸 康利
		山村 信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子
技 師		井上 信正
技師(囑託)		田中 克子(～平成6年7月31日)
		下川可容子

整理参加者は、次のとおり。(順不同、敬称略)

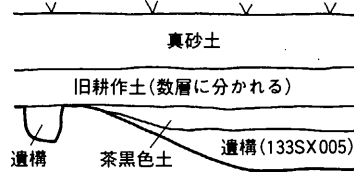
河田 聡						(以上、調査補助員)
森田レイ子						(以上、遺物整理補助員)
菊武 淑子	黒木 美幸	小西 晴代	境 一美	白水 文恵	鶴味加代子	
中村 房子	林 美知子	武堂 年子				(以上、遺物整理作業員)



Ⅲ. 調査の概要

(1) 層位について

当地は、真砂土により約1m盛り土されており、これを除去した後、旧耕作土が出現する。その下層では水田耕作土と考えられる層を数層、土層観察により確認しているが、これらが機能していた時期等については不明である。この最下層に茶黒色土の包含層が堆積しており、これを除去すると遺構面に達する。茶黒色土層は、調査区中央の、遺構が密集し遺構埋土が沈み込んでいる部分で堆積しているのが確認される。その他の部分では上層の包含層により削られ消失しているが、もともとは遺構面全体を覆っていたものと推測される。



地山は、133SD010以西は灰茶色粘土の安定した地盤であるが、これ以东は、灰色砂の脆弱な層が厚く堆積している。この地山の変換線沿いに133SD010が掘削されている。

Fig. 3 条133調査区土層模式図

(2) 検出遺構

今次の調査では、溝2条、井戸5基、大土塋あるいはたまり状遺構が1基、その他ピット等を検出した。遺構密度は西に行くほど高くなっているが、東側には遺構がほとんどみられなかった。遺構面の水平レベルも西に行くほど高くなっている。なお本調査は、排土置き場の関係から、調査区西側を調査・完掘した後、反転して調査区東側を調査している。

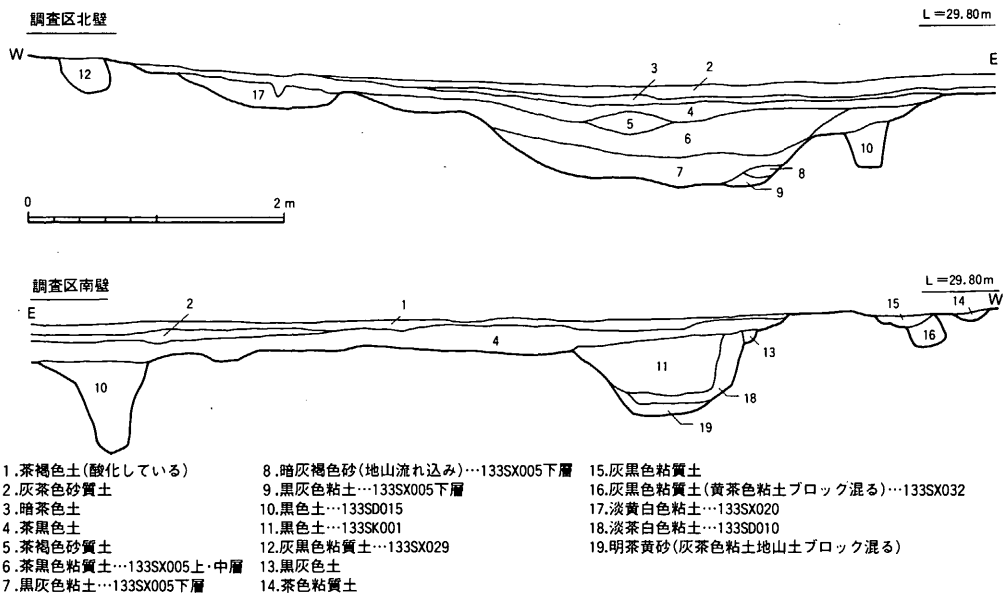


Fig. 4 大宰府条坊跡第133次調査西調査区土層図 (S = 1/60)

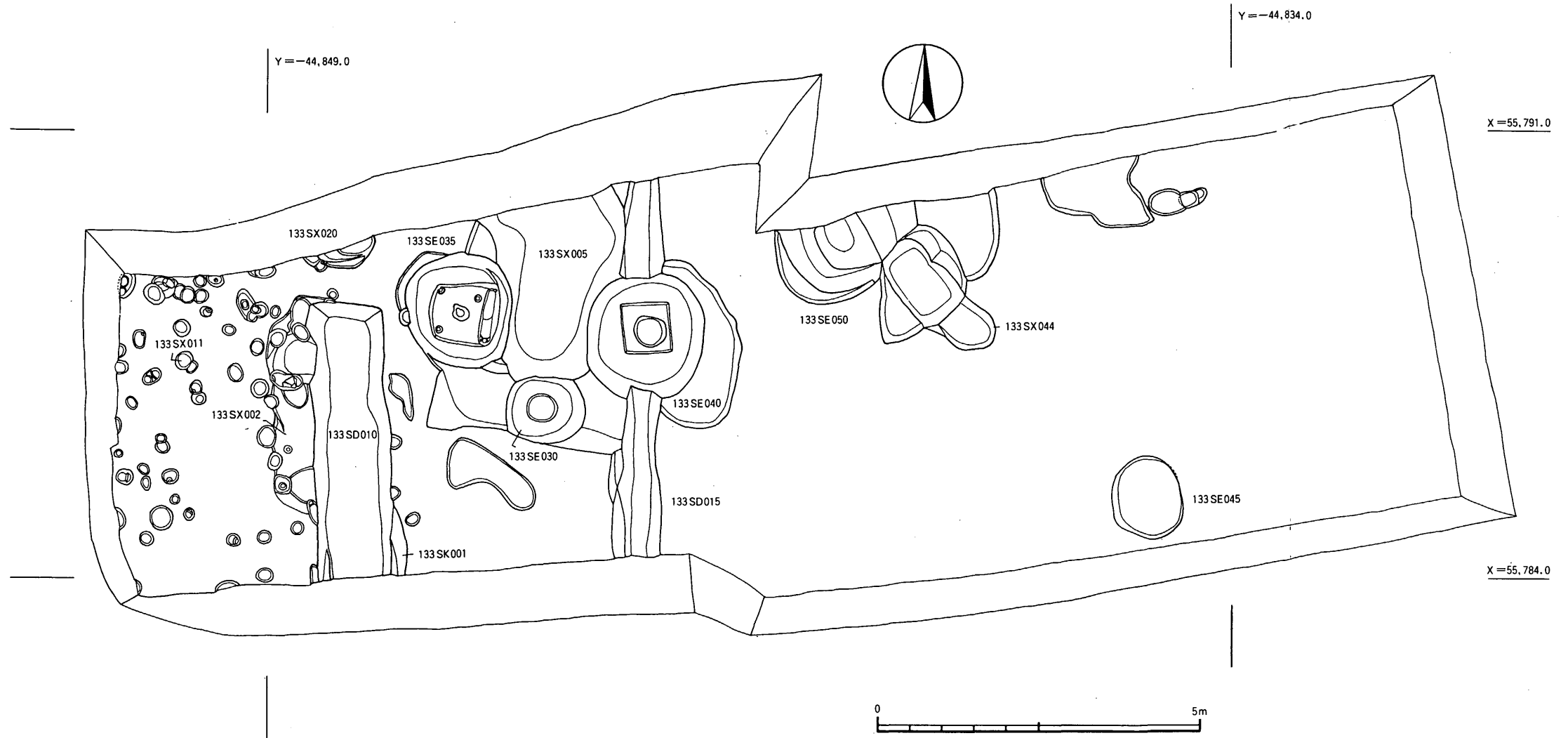


Fig. 5 大宰府条坊跡第133次調査遺構図

溝

133SD010 (Fig. 4, 6 Pla. 5)

調査区の西側を南北に走る溝である。133SK001、133SX002、ピット群等がこの遺構に切り込んでいる。検出長4.3m、幅約1.2m、深さ約0.5mを測り、およそGN-3° 10′ -Wに振れている。断面は逆台形を呈す。南側は調査区の外に更に延びると推測されるが、北側は調査区内で切れている。この北側の延長上には、本溝と埋土の類似する133SX020があり、これが溝として北に延びる可能性がある。両遺構の間隔は約0.5m、両者を合わせると約5.2m分検出したことになる。本溝の埋土は3層に分かれる。最下層の灰色砂土は、砂中に地山と同質の灰茶色粘土ブロックが若干混入し、それらの一部の表面は酸化している。ある一定期間本溝は開いており、その間に自然堆積したのがこの層であろう。中から遺物は出土していない。上中層はよく似た土質で、粘土が詰まったような印象を受ける。

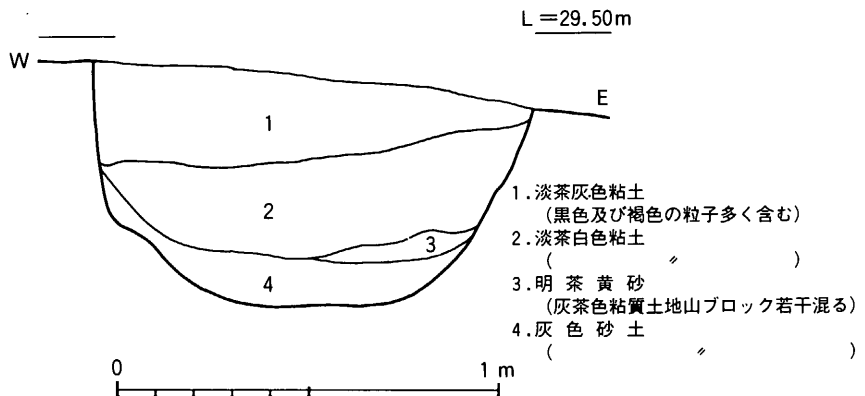


Fig. 6 133SD010土層図 (1/20)

この層は人為的に埋められたものであろう。

溝の位置と方向及び東側に同時期の遺構がないことから、本溝は朱雀大路の西側溝と推定される。

133SD015 (Fig. 4 Pla. 6)

調査区の中央西寄りを南北に、直線的に走る溝である。茶黒色土層や133SX005を除去した後には検出された。検出長約5.9m、幅0.6~0.8m、深さ約0.5mを測り、その断面は細長い逆三角形を呈す。およそGN-0° 48′ -Wに振れ、溝は調査区を越えて南北に延びている。溝の位置及び振れ等から、本溝は平安時代の朱雀大路西側溝と推定している。埋土は黒色土の単一層で、流水作用の痕跡は見られない。中からは廃棄されたと考えられる土器が大量に出土した。重なるようにして検出されたものもある。出土遺物は一括性の高い資料群と考えられ、溝埋没過程の中で土器が廃棄され、最終埋没に至ったとみられる。

井戸

133SE030 (Fig. 7)

調査区のほぼ中央で検出された井戸で、133SX005を除去した時点で検出された。掘り方の

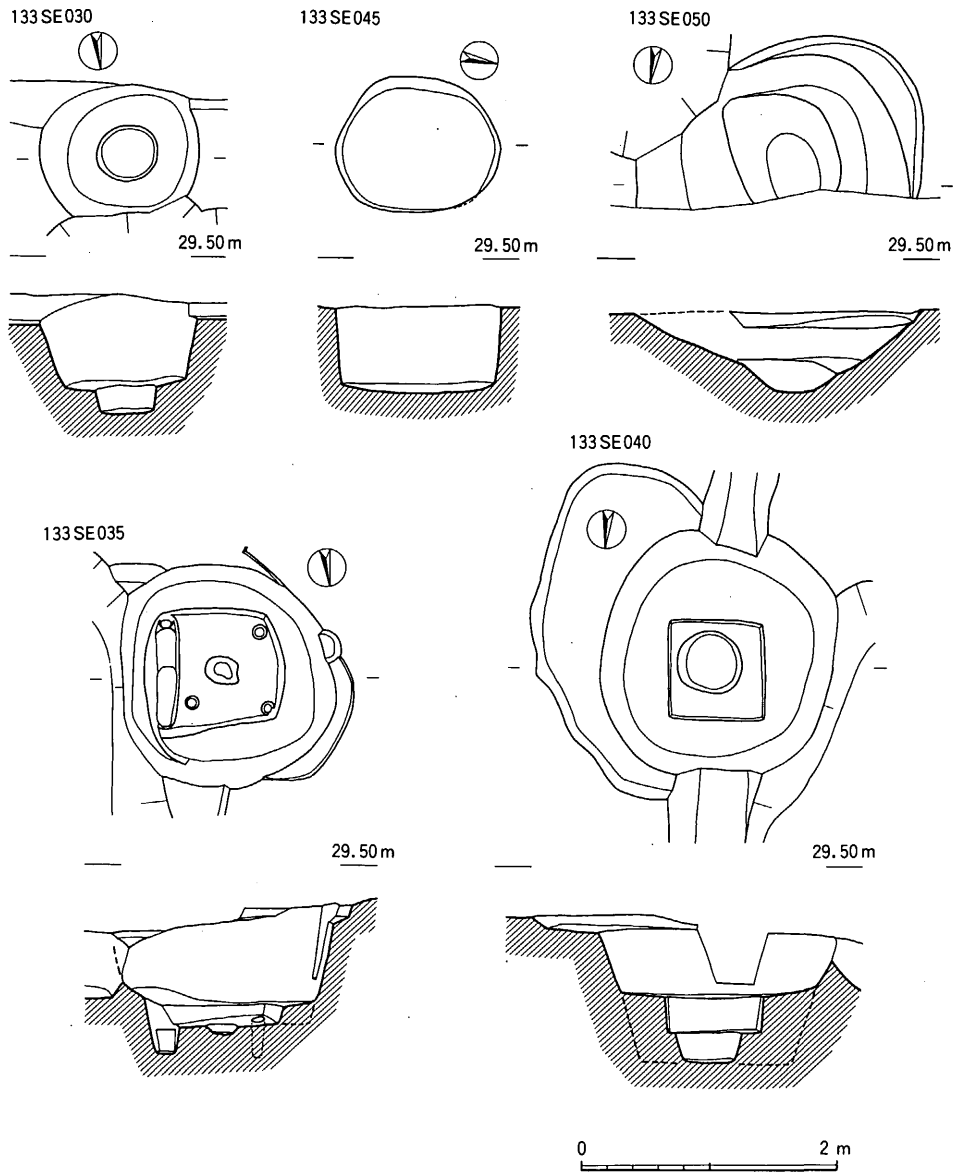


Fig. 7 大宰府条坊跡第133次調査検出井戸実測図 (1/60)

平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は、南北1.02m、東西1.24mを測る。井戸枠は確認されず、最下位に円形の掘り方を確認した。その規模は、南北0.44m、東西0.48m、深さ0.22m、曲物を使用した水澄ましが設けられていたと推定される。埋土の主体は、黒灰色系の粘質土である。

133SE035 (Fig. 7 Pla. 7)

調査区の中央で検出された井戸のうち最も西寄りのものである。133SX005を除去した時点で全体プランが確認された。掘り方の平面プランは、径1.8m程度の円形を呈し、中心部までの深さは約1mを測る。下位では、軸をおよそGN-8° 30′ -Eに向ける方形の掘り方が検出され、その規模は南北0.92m、東西1.1m、深さ約0.16mを測る。最下位には、中央に径約25cm、深さ10cm以下のわずかな窪みがあり、それを囲むように径約10cm、深さ約30cmのピットがほぼ四隅に配されている。この井戸は、方形の井戸枠を有し、四隅を杭で固定する構造であったと推定され、中央の窪みは、曲物を据えていた痕跡と推測される。また、方形の掘り方の東壁沿いには、幅約10cm、深さ約20cmの溝が走っている。井戸枠が据えつけに伴う溝とも推測されるが、板材の痕跡などは確認していない。埋土は、灰黄色粘土を挟んで上下に分かれる。方形プランは灰黄色粘土を除去した地点で検出している。

133SE040 (Fig. 7 Pla. 7)

調査区のほぼ中央で検出された井戸で133SX005や133SD015に切られる。掘り方の平面形は、ほぼ正円を呈し、その規模は南北約1.92m、東西1.80m、深さ1.06mを測る。井戸枠を検出するまで灰色砂層、次に灰黄色砂層と順に検出された。これらの層を除去した後に、方形の井戸枠の掘り方を確認した。規模は、南北0.8m、東西0.76m、深さ0.28mである。枠は残存していなかった。この最下には、円形の水澄ましが見えられている。その規模は、東西0.5m、南北0.48m、深さ0.24mで、これも枠は残存していなかった。井戸枠と水澄ましのあった最下層の埋土は同じであったが、遺物は分けてとりあげている（133SE040枠内、133SE040最下層）。

133SE045 (Fig. 7 Pla. 8)

調査区東で検出された井戸である。掘り方の平面形は、長軸を南北に向けた楕円形を呈しており、その規模は、長軸1.35m、短軸1.07m、深さ0.68mである。枠は残存していない。

133SE050 (Fig. 7 Pla. 8)

調査区の中央、北隅で検出された井戸で133SX042に切られる。調査区の北壁にかかっているため遺構の北半は不明であるが、平面プランほぼ正円を呈すものと推測され、掘り方は、二段掘りとなっている。規模は検出分で東西約2.2m、南北約1.22m、深さ0.62mである。この遺構は上記のように段掘りになっており、最下位の水平レベルは周囲の井戸と変わらないことから、これも井戸として報告した。最下部には径約0.4m、深さ約0.25mほどの窪みがあり、かなり形状が崩れているが、水澄ましが見えられていた可能性も考慮する必要がある。埋土に、黒色土、暗灰色粘土、黄茶色粘土の細かいブロックを含む帯状の層があることから、埋め戻しが行われたことが窺える。

土壌

133SK001 (Fig. 4, 5)

調査区の西側で検出した遺構で、133SD010を真上から切っている。検出長約1.35m、幅約

1. 18m、深さ0.42mを測る。調査区南壁にかかった部分での断面は逆台形を呈す。黒色土埋土。

その他の遺構

大土壇あるいはたまり状遺構

133SX005 (Fig. 4, 5 Pla. 8)

調査区のほぼ中央で、調査区北壁にかかって検出された遺構である。明確な平面プランを有しておらず不定形であるが、その規模は東西2.5m、南北3.6m以上、深さ0.5m前後である。調査の段階では、上中下と三層に分けて遺物取り上げを行ったが、上中層については基本的に層位は等しいものである。各層とも遺物が大量に出土し、重ねられた状態で出土したものも多い。出土状況と遺物の検討から、総じて一括廃棄されたと考えられる。

埋土中には、地山土等のブロックは含まれておらず、土器廃棄後自然に堆積したものと推測している。

ピット等その他の遺構

133SX002 (Fig. 4)

調査区西端で検出したたまり状遺構である。プランは長軸3.5m、短軸1.2~1.5mの不定形である。茶黒色土層に類似した埋土である。

133SX011 (Fig. 4)

調査区西端で検出された直径約0.25m、深さ約0.3mのピットである。ここから緑釉陶器をはじめ、平安時代の遺物が出土している。

133SX044 (Fig. 4)

調査区中央東よりで検出された長軸約2.0m、短軸約0.8mの不整形を呈する土壇状遺構である。出土した遺物には時期幅が見られるが、平安時代後期の遺構と考えられる。出土遺物の中には、越州窯系青磁の小椀があるが、遺構に伴うものではないと考える。

包含層

茶黒色土層

先述したように、本来遺構上面を覆っていた遺物包含層と推定されるが、その大部分が後世の削平を受け消失している。本層の遺存状態がもっとも良好であったのは、調査区のほぼ中央部、特に133SX005の上面である。この付近から出土した遺物は12世紀前半とみられるものが大半で、133SX005と時期的にほとんど変わらない。土質はこの直上に堆積する層(水田耕作土)に類似しており、本層も同様に水田等の耕作土であった可能性がある。つまり、ここから出土した資料は本来133SX005に帰属していた遺物を含んでいる可能性が高いと推測している。

調査においては、本層は遺構を全面的に覆うと仮定した人工層位として扱っている。従って茶黒色土層出土遺物の総体は、必ずしも本層を性格づけるものではないことをつけ加えておく。

(3) 出土遺物

最初に、今回報告した土師器の小皿 a について、口径が9 cm前後のもの、11cm前後のもの二者があり、後者については、坏 a としたほうがよいと思われる場合もある。しかし、今回は両者を小皿 a としている。両者の分別は文章中に記載した。

溝出土土器

133SD010出土土器 (Fig. 8 Pla. 9)

須恵器

坏 a (1) 口径約18.0cm。内外面ともヨコナデで調整し、内底はナデで、外底は回転ヘラ削りで仕上げている。胎土は、黒粒、白粒を含むが精良であり、青灰色を呈す。

この他、図示しなかったが、製塩土器片なども出土している。

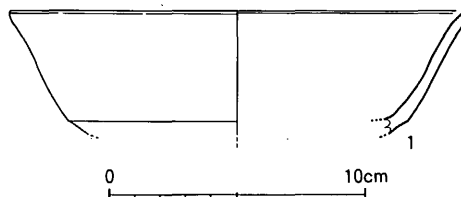


Fig. 8 133SD010出土土器(1/3)

133SD015出土土器 (Fig. 9 Pla. 9)

土師器

小皿 a (1~5) 1~4はヘラにより、5は糸により底部切り離しを行う。口径8.8~9.4cm、器高1.3~1.4cm、底径6.6~7.3cmを測る。いずれも内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げているが、4はさらに内面にミガキbを入れて仕上げているようである。また、1・3・4は、外面底部にコテ当ての痕跡を残しており、底部切り離し後にミガキ具による器面調整が行われている。

丸底坏 a (6~22) 6~20はヘラにより、21・22は糸により底部切り離しを行う。口径14.4~16.0cm、器高2.8~4.1cm、底径6.1~13.0cmを測る。風化等により調整不明のものもあるが、いずれも内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。外面に底部押し出しに伴う指頭痕を残すものもある。また20は、底部切り離し後にミガキ具による器面調整が行われている。器形についてみると、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプ(6~12)、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の坏の原形を残すタイプ(13~19・21・22)、さらにその中間のタイプ(20)がある。なお、21の口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。

瓦器

椀 c (23・24) いずれも底部の破片である。23は高台径約4.9cmを測る。内外面ともミガキcによって仕上げ、見込みには平行ミガキが入る。底部は、ヘラ切り後、高台貼り付けにともなう回転ナデにより処理されている。24は高台径6.7cmを測る。内外面ともナデにより調整され

る。底部は、ヘラ切り後、若干の器面調整を施し、高台を貼り付けている。

白磁

椀(25・26) 25は、Ⅱ類、底部の破片である。高台径約6.8cm。ごく細かな黒粒を含んだ白茶色のやや粗い素地で、半透明の釉が内外に薄く施釉される。高台部は露胎である。26は、Ⅳ類、底部の破片である。黒粒を含んだ乳白色の素地で、半透明の釉が厚目に、内面に施釉される。外面は露胎である。

小壺蓋(27) Ⅱ系。ボタン状の大きなつまみを有し、下部に円柱形の差し込み口が取り付けられている。つまみ部は三段に積まれたように隆起し、最大径3.8cm、高さ0.7cmである。差し込み口は径1.9cm、高さ0.5cmの円柱形を呈す。素地は淡白茶色を呈す精選された緻密なもので、やや青みがかかった透明な釉が、つまみ上面にのみ施釉される。

井戸出土土器

133 SE 030出土土器 (Fig.10 Pla.10)

埋土出土土器と最下層出土土器に分けて述べる。

(埋土出土土器)

土師器

小皿 a (1・2) ヘラにより底部切り離しを行う。口径9.0~9.4cm、器高1.2~1.4cm、底径6.6~7.5cmを測る。いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

皿 c (3) ヘラにより底部切り離しを行う。口径12.6cm、器高2.8cm、高台径4.9cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分については、不定方向の強いナデによって仕上げている。高台は手持ちで付けられており、貼り付けの際の指頭痕が明瞭に観察される。

丸底坏 a (4・5) ヘラにより底部切り離しを行う。口径14.6~15.0cm、器高3.1~3.2cm、底径9.8~11.5cmを測る。いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキ b により仕上げている。器形についてみると、4は、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプで、5は、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の坏の原形を残すタイプである。

瓦器

椀(6・7) 6は、口径16.7cm、器高5.9cm、高台径6.8cmを測る。内外面ともミガキ c によって仕上げ、見込みには平行ミガキが入る。外面下半には、底部押し出しによる指頭痕が観察される。底部はヘラ切り後軽く器面調整され、高台を貼り付けている。7は底部の破片で、高台径6.7cmを測る。内面は平行ミガキで仕上げられる。外面は風化により不明である。底部は、ヘ

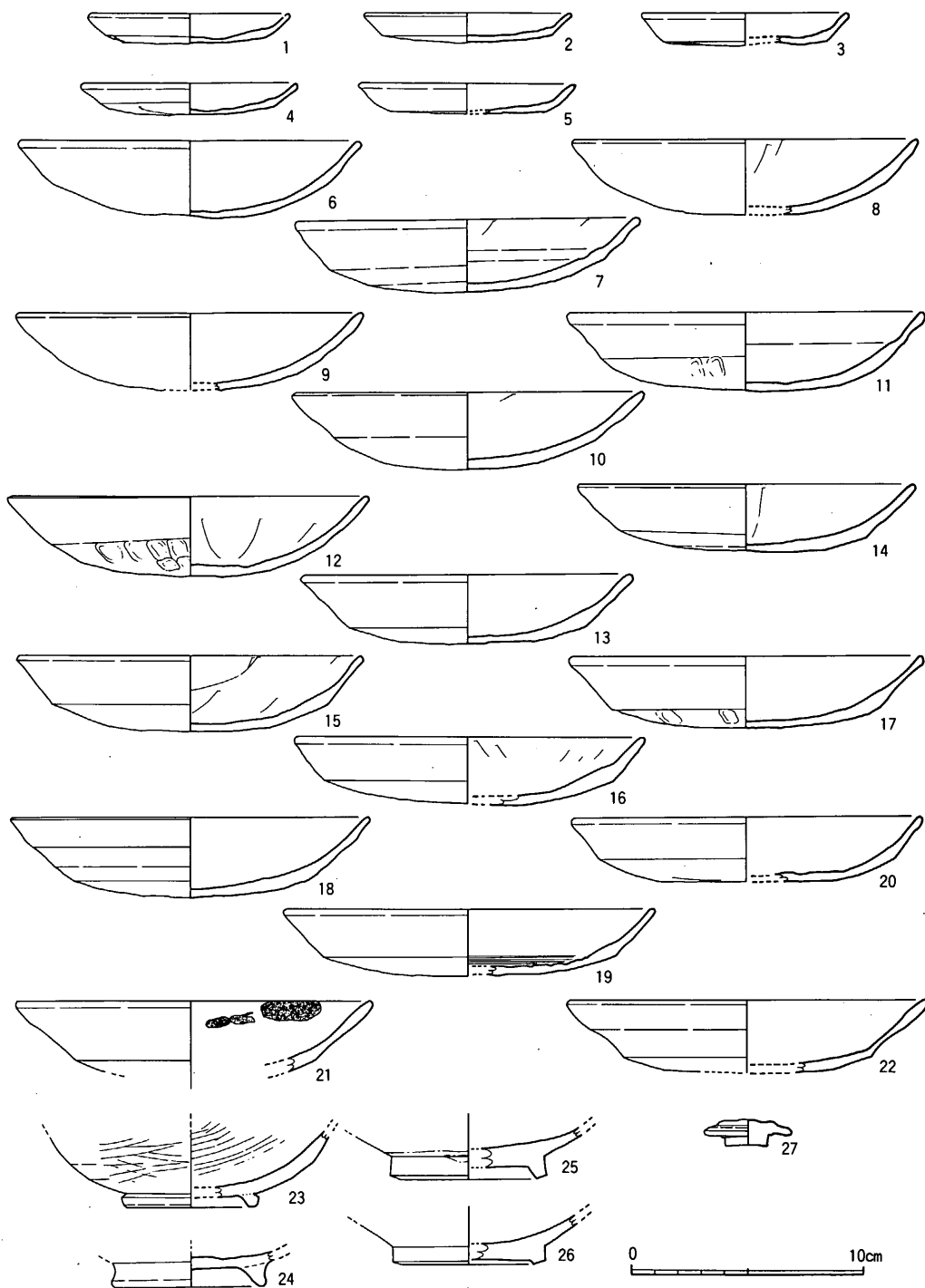


Fig. 9 133SD015出土土器 (1/3)

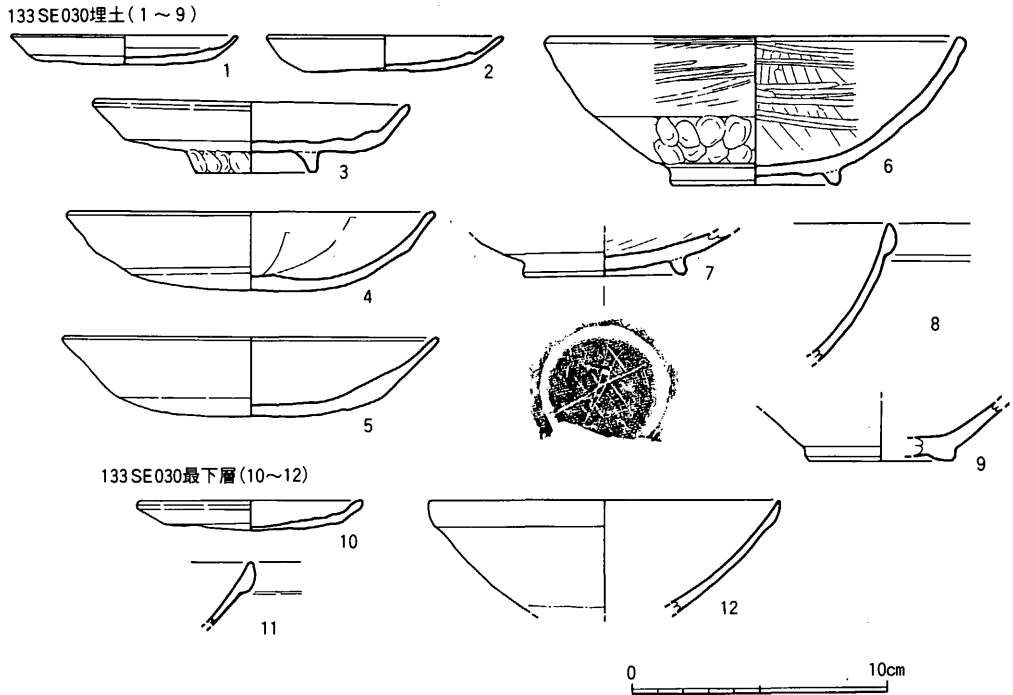


Fig.10 133SE030出土土器 (1/3)

ラ切り後若干の器面調整を施し、高台を貼り付けている。高台の内側には焼成後にヘラ記号が施されている。

白磁

碗(8) IV類。黒粒を含んだ乳白色の素地で、半透明の釉が内外に施釉される。体部下半は露胎である。

高麗青磁

碗(9) I-1類。底部の破片である。高台径6.0cm。暗灰青色の緻密な素地で、暗青緑色の釉が全面に施される。

(最下層出土土器)

土師器

小皿a(10) ヘラにより底部切り離しを行う。口径9.1cm、器高1.2cm、底径7.1cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。底部に板状圧痕あり。

白磁

碗(11・12) IV類。両者とも黒粒を含んだ乳白色のやや粗い素地で、半透明の釉が内外に施釉される。3の体部下半は露胎である。

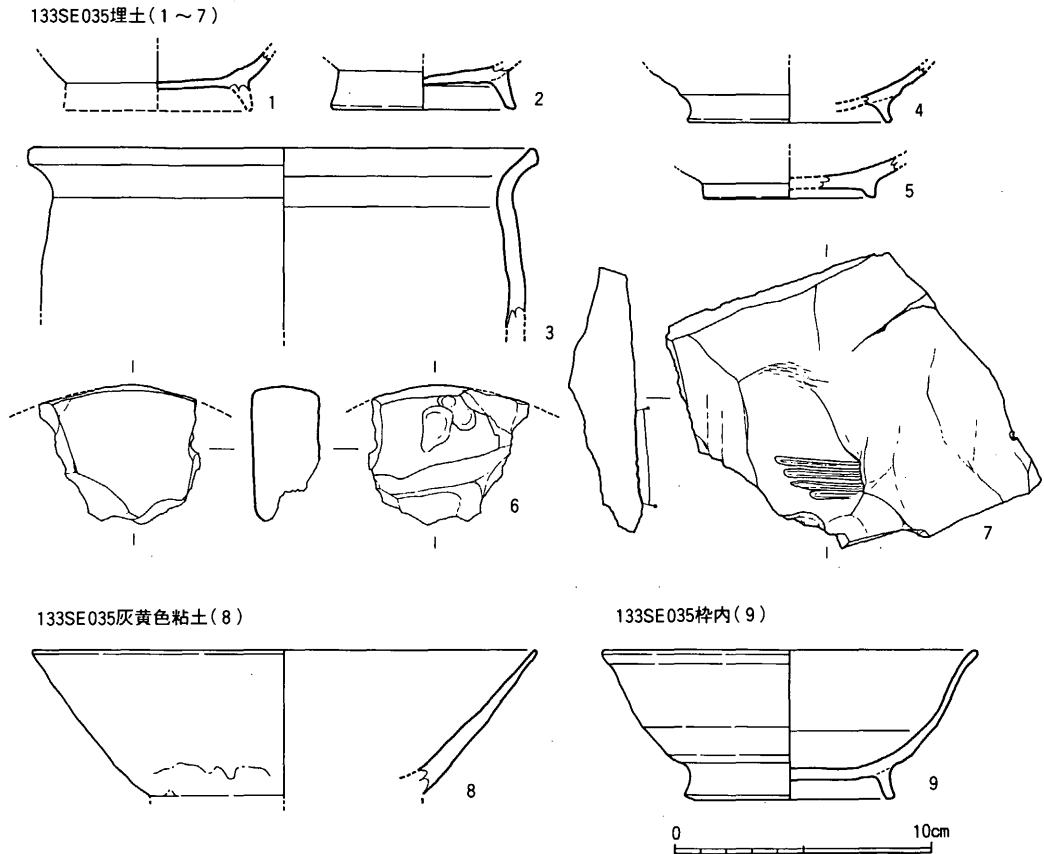


Fig.11 133 SE035出土土器 (1/3)

133 SE035出土土器 (Fig.11 Pla.10)

埋土出土土器、灰黄色粘土出土土器、椀内出土土器に分けて述べる。

(埋土出土土器)

土師器

碗 c1(1) 底部のみ残存する破片である。ヘラにより底部切り離しを行う。残存高台径約7.3cm。内面は風化により調整は不明。外面は、ヨコナデにより調整を行う。

碗 c (2) 底部のみ残存する破片である。ヘラにより底部切り離しを行う。残存高台径7.4cm。内面見込みは不定方向のナデにより仕上げる。底部は、高台取付けに伴う回転ナデの調整が入る。

甕 (3) 口縁部の破片である。口径約20.2cm。0.1cm以下の砂粒を含むが、良好で密に詰まった胎土で、焼成は良好である。外面は赤褐色を呈し、内面は一部灰褐色であるが、全体的に淡茶色を呈す。体部は、わずかに内傾しつつも直立状に立ち上がり、体部と口縁部との境の屈曲は緩やかである。口縁部は、わずかに肥厚させ口縁端部を丸く納める。内外面ともヨコナデで調整している。

黒色土器A類

碗c(4) 底部の破片である。高台径8.2cmを測る。内面は風化により調整不明。外面はヨコナデで調整される。底部は、やや細い高台を貼り付ける。

緑釉陶器

小碗c(5) 高台の一部が残存する破片で、明緑色の釉が全面に施釉される。釉はかなり薄い。胎土は淡灰色を呈し、0.01cm程度の砂粒が若干含まれる。京都産か。

土製品

6は、土師質の製品の破片である。原形は円盤状になると推測される。図上の計測では、6.3×5.6cm、厚さ約2.7cm。スサが入っているがかなり精選された橙灰色の胎土で、焼成は良好である。全面を丁寧に器面調整しており、後に指頭痕が入った部分が一部見られる。なんらかの生産用具であろう。

滑石製品

7は、長軸15.9cm、短軸11.9cmの菱形に残存する。表面中央の一部に面が辛うじて残っており、そこに幅0.3cm、深さ0.1cmほどの溝が4条、平行に走っている。その他の面は剥落している。

(灰黄色粘土出土土器)

越州窯系青磁

碗(8) I類。復原口径約20.0cm。精選された緻密な灰褐色を呈す素地で、光沢のある緑灰色の釉が内外に施される。釉のかかりに若干ムラがある特徴あり。体部下半は露胎である。

(粹内出土土器)

土師器

碗c2(9) ヘラにより底部切り離しを行う。口径14.9cm、器高5.95cm、高台径8.4cm。内外ともにヨコナデで調整し、内面見込みはナデで仕上げる。底部は、高台取付けに伴う回転ナデの調整が入っている。

133SE040出土土器 (Fig.12 Pla.11)

灰色砂出土土器、最下層出土土器に分けて述べる。灰黄色砂層の遺物は、不本意にも整理の段階で灰色砂出土遺物と混じてしまったため、灰色砂出土土器として総じて報告する。

(灰色砂出土土器)

土師器

碗c2(1) ヘラにより底部切り離しを行う。口径約17.0cm、残存高台径8.3cm。器高は約4.9cm前後に復原される。風化により内外面ともに調整不明。底部は、高台取付けに伴う回転ナデの調整が入っている。

黒色土器A類

椀 a (2) 口径約15.1cm。ヘラにより底部切り離しを行う。風化により調整は不明であるが、外面底部はヘラ削りで調整しているようである。

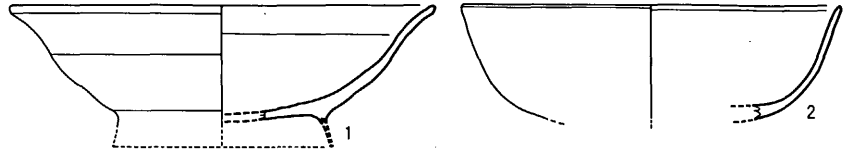
この他、越州窯系青磁椀Ⅱ類も出土している。

(最下層出土土器)

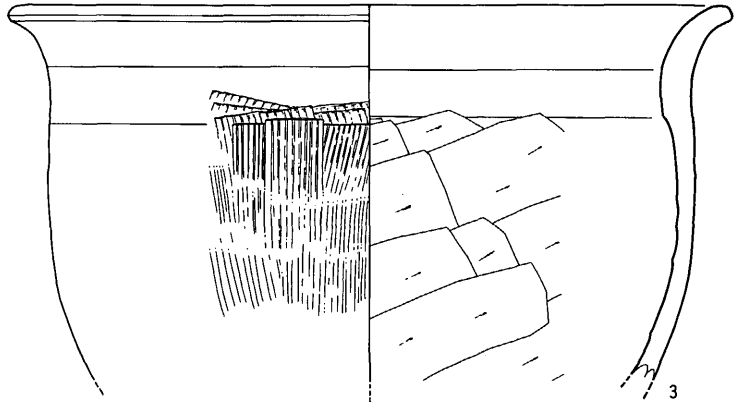
土師器

甕 a (3) 底部を欠いているが口縁部が1/3程度残存する大きな破片である。口径約28.7cm。0.2cm以下の砂粒を大量に含む胎土で、焼成は甘い。内面は削り、外面はハケ目を施し、口縁部はヨコナデを行う。

133SE040灰色砂(1~2)



133SE040最下層(3)



133 SE045出土土器

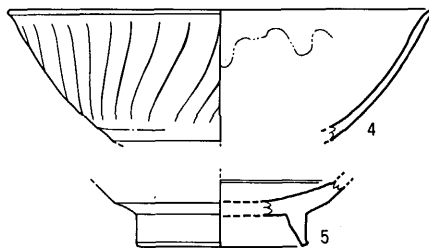
(Fig.12 Pla.

11)

白磁

椀 (4・5) 4は、V-2 b類。口径17.0cm。明乳灰色の素地で、半透明の釉が内外に施釉される。内面

133SE045(4~5)



133SE050(6~8)

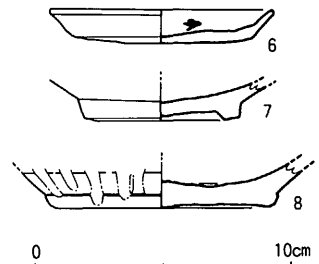


Fig.12 133 SE040・133 SE045・133 SE050出土土器 (1/3)

上部は釉が垂れている。外面下部は露胎である。5は、ⅩⅢ類。高台径約6.8cm。白灰色を呈す素地で、透明な釉が内面に施される。外底は露胎である。

この他、丸底坏 a、中国陶器片など出土している。

133 SE050出土土器 (Fig.12 Pla.11)

土師器

小皿 a (6) ヘラにより底部切り離しを行う。口径8.9cm、器高1.4cm、底径7.2cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向の強めのナデで仕上げる。板状圧痕あり。内外面ともに焼け焦げたような痕跡がある。

白磁

椀 (7) IV類。底部のみ残存している。高台径6.2cm。黒粒を含んだ灰白色のやや粗い素地で、内面に半透明な釉がやや厚く施釉される。外面は露胎である。

越州窯系青磁

椀 (8) II-3 a類。底部の破片である。底径約9.2cm。砂粒をわずかに含んだあまり良好といえない淡茶灰色を呈す素地で、やや暗い緑灰色の釉が、内面に薄く施釉され、外面は釉垂れした状態で観察される。底部はヘラ切りされ露胎である。なお、露胎している素地の表面は明橙赤色に変色している。

土壇出土土器

133SK001出土土器 (Fig.13 Pla.11)

土師器

小皿 a (1・2) いずれもヘラにより底部切り離しを行う。1は、口径9.2cm、器高1.0cm、底径7.5cm。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

2は、口径10.9cm、器高1.5cm、底径8.0cm。内面は風化により不明であるが、外面はヨコナデにより調整している。

丸底坏 a (3・4) いずれもヘラにより底部切り離しを行う。口径15.5~15.7cm、器高3.6~3.8cm、底径10.8~12.3cmを測る。いずれも内面は風化等により調整不明であるが、外面はヨコ

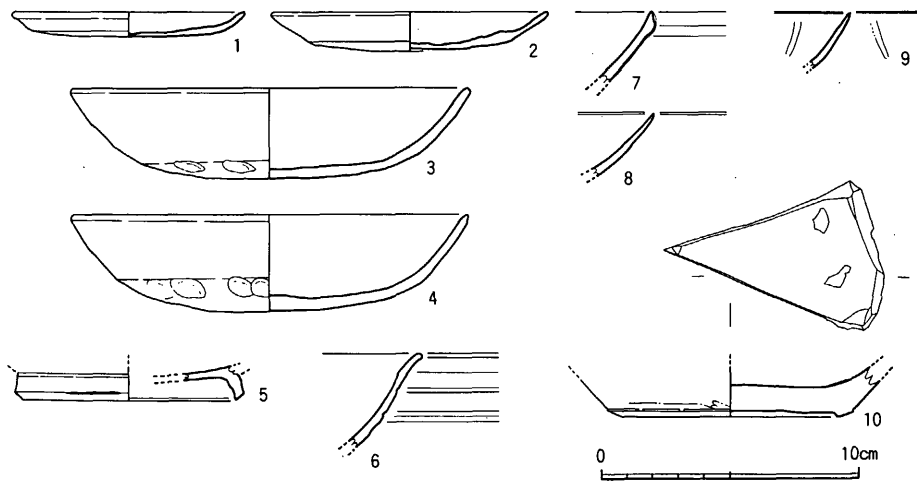


Fig.13 133SK001出土土器 (1/3)

ナデにより調整し、また外面に底部押し出しに伴う指頭痕を残す。器形についてみると、両者とも器厚は全体的に均厚ではあるが、外面に若干稜を有し、底部押し出し前の坏の原形が観察される。

灰釉陶器

碗(5) 高台径9.0cm。灰褐色の緻密な胎土で、灰緑色の釉が内面に施釉される。底部は露胎である。畳付けには、重ね焼きによると思われる釉の付着がみられる。

山茶碗

碗(6) 破片資料であるが、15cm前後の碗とみられる。砂粒をほとんど含まない良好な胎土で、灰褐色を呈す。内外ともにヨコナデで調整され、外面には幅0.2cm程度の沈線が入る。

白磁

碗(7・8) 7は、IV類。黒粒を含んだ明乳白色のやや粗い素地で、半透明の釉が厚目に、内外に施釉される。8は、XI-5類。やや粗い素地で、薄く緑がかった透明な釉が、薄く内外に施釉される。輪花あり。

皿(9) VII-1類か。乳白色のやや粗い素地で、透明な釉が内外に施釉される。貫入あり。

越州窯系青磁

碗(10) I-2・ウ類。底径9.6cm。わずかに黒灰色の粒子を含むが非常に精良で緻密な灰褐色を呈す素地で、深緑灰色の釉が薄く、内外に施釉される。底部は露胎しており、素地は淡い橙赤色に変色している。

その他の遺構出土土器

大土壇あるいはたまり状遺構出土土器

133SX005出土土器

遺物は上層、中層、下層の3層に分けて取り上げた。以下、各層毎に報告する。

上層出土土器 (Fig.14 Pla.12)

土師器

小皿a(1~7) 1~4はヘラにより、5~7は糸により底部切り離しを行う。口径8.5~9.5cm、器高1.1~1.5cm、底径5.3~8.0cmを測る。いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

丸底坏a(8~14) 8~13はヘラにより、14は糸により、底部切り離しを行う。口径15.0~17.0cm、器高2.4~3.6cm、底径11.4~13.5cmを測る。風化等により調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。外面に底部押し出しに伴う指頭痕を残すものもある。器形についてみると、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプ(8~11、14)と、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出

し前の坏の原形を残すタイプ(12・13)がある。なお、14の口縁外部にはわずかに煤が付着しており、灯明皿として使用されたと推測される。

須恵質土器

鉢(15) 口縁部が1/4程度残存する破片である。灰色を呈し、小石や砂粒を含みつつも、きめ細かな胎土である。底部は糸により切り離しが行われる。体部は、内湾さみではあるが、外方へほぼ直線的に立ち上がり、口縁部近くで上方へ緩やかに屈曲させ、口縁端部をつまみ上げる。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分については、不定方向のナデによって仕上げている。

白磁

椀(16~20) 16は、IV類、口縁部の破片である。復原口径約17.9cm。黒粒を含んだ乳白色の素地で、半透明の釉が厚目に、内外に施釉される。17は、IV-1類、底部の破片である。底径は7.4cm。黒粒を含んだ乳白色のやや粗い素地で、半透明の釉が内外に施釉される。高台部は露胎である。18は、IV-1類、底部の破片である。底径は約7.0cm。黒粒を含む乳白色の粗い素地で、半透明の釉が厚目に、内外に施釉される。高台部は露胎である。19は、Ⅲ類、底部の破片である。底径は6.2cm。灰色を呈す精良な素地で、透明感のある釉が内面に薄く施釉される。高台部は露胎である。20は、V-3類、口縁部の破片である。明灰白色を呈す緻密な素地で、透明の釉が薄く内外に施釉される。

皿(21・22) 21は、Ⅱ~Ⅲ類、口縁部の破片である。白灰色を呈すやや粗い素地で、透明の釉が薄く内外に施釉される。22は、VI類、口縁部の破片である。灰白色を呈す緻密な素地で、やや緑色を帯びた透明感のあるの釉が、薄く内外に施釉される。

越州窯系青磁

椀(24) Ⅱ類、底部の破片である。底部外面を露胎に残し、他の部位に施釉するものと考えられるが、内面にわずかに釉が残存しているのみである。釉調は暗灰緑色を示し、素地は黒粒を含んだ灰青色のやや粗い素地特徴を有している。

青白磁

皿(23) 口縁部の破片である。体部は、直線的に立ちあがっており、口縁部は、外方に折り曲げ水平面を形成している。体部は、外面から筋状の押し込みが縦に入っており、輪花状になっている。素地は、白灰色の精選された素地特徴を呈しており、釉調は、透明感のある淡白青色を呈している。

土製品

25は、土師質の破片である。長さ3.9cm以上、幅2.75cm、厚さ1.2cm。淡灰茶色を呈し、胎土は、0.05cm以下の砂粒を含む。あまり精良な胎土とはいえない。表面には、長さ2.6cm以上、幅1.8cm、深さ0.05cm以下のわずかに窪んだ平滑な面があり、卵形を呈している。側面は、三方が

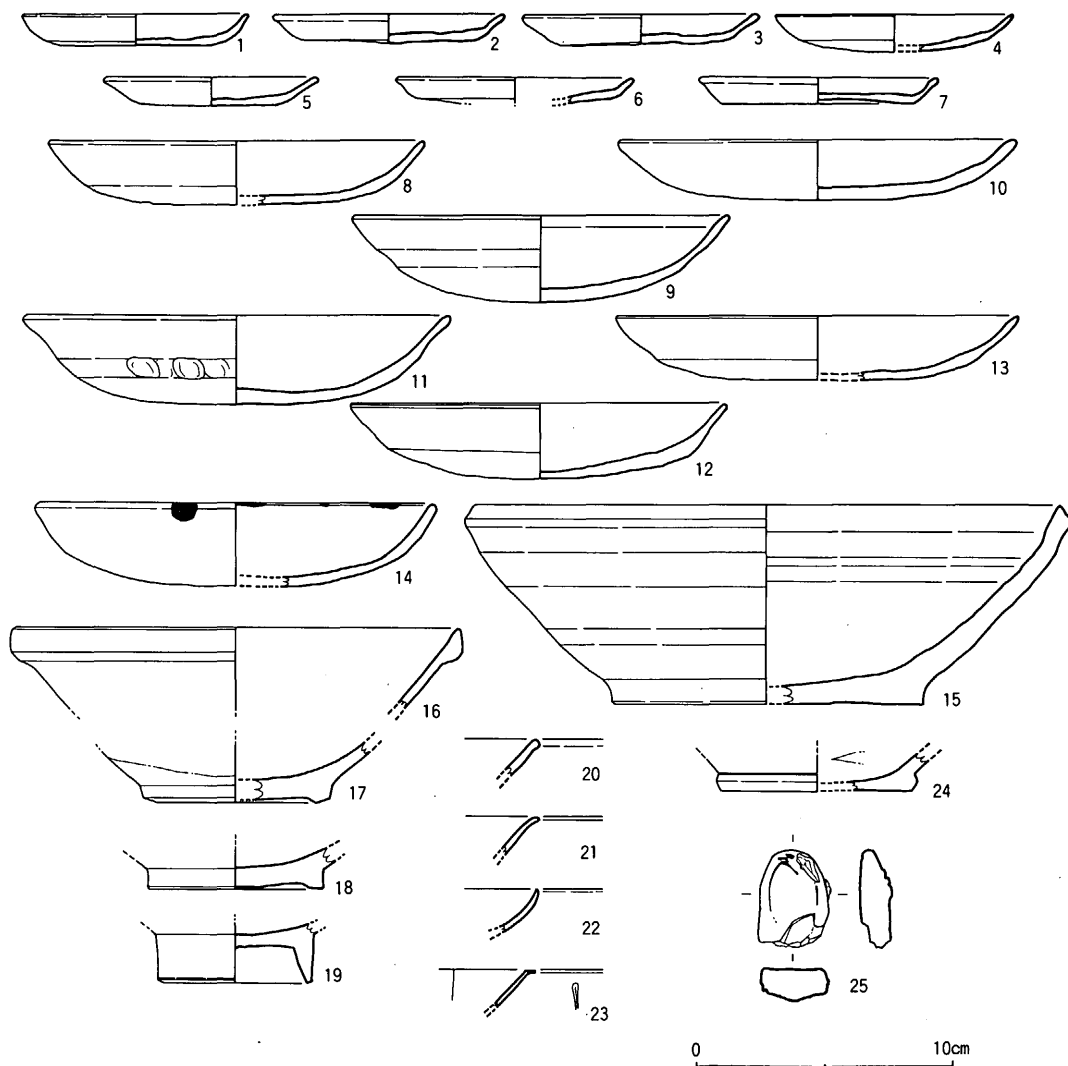


Fig.14 133SX005上層出土土器 (1/3)

指頭により調整される。裏面も指頭で調整され、その上にモミ殻状のものが付着した痕跡が観察される。図上の下方については欠損しているが、さらに続くものと推測される。鋳型か。

中層出土土器 (Fig.15 Pla.12~13)

土師器

小皿 a (40) ヘラにより底部切り離しを行う。口径9.2cm、器高1.1cm、底径7.1cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整する。見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

坏 (39) ヘラにより底部切り離しを行う。口径15.4cm、器高2.6cm、底径12.5cmを測る。外面

外面ともヨコナデにより調整する。見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

坏 (39) ヘラにより底部切り離しを行う。口径15.4cm、器高2.6cm、底径12.5cmを測る。外面は、ヨコナデにより調整している。内面は風化により調整は不明だが、口縁部付近に、ミガキbの痕跡を観察できる。丸底坏aの成形手法を用いている可能性が高いが、器形から判断して、ここでは坏aとした。

丸底坏a (26~38) ヘラにより底部切り離しを行う。口径14.0~17.7cm、器高2.6~3.6cm、底径11.2~14.6cmを測る。風化等により調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。器形についてみると、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプ (26~29)、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の坏の原形を残すタイプ (30~36)、さらにその中間のタイプ (37・38) がある。なお、28の口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。

黒色土器B類

碗c2(41) 底部の破片である。高台径8.0cmを測り、内外面ともミガキcによって仕上げている。底部はヘラにより切り離され、やや細く高めの高台を貼り付ける。

瓦器

碗c2(42) 底部の破片である。高台径7.2cmを測り、内外面ともミガキcによって仕上げている。見込みは、平行ミガキの後ジグザグ状のミガキが入る。底部は、回転ナデにより底部処理の痕跡が消されている。

緑釉陶器

坏c (43) 高台の一部が残存する破片で、暗緑灰色の釉をまだら状に含む緑灰色の釉が全体に施釉される。胎土は、灰白色を呈した精良なもので、軟質である。長門産。

白磁

碗 (44・47) 44は、II-5類、口縁部の破片である。白灰色を呈す精選された素地で、透明な釉が全体に薄く施釉される。内面に細かな気泡が見られる。47は、II-1×3類、底部の破片である。高台径約6.4cm。白灰色を呈す精選された素地で、外面の体部下半から底部にかけて露胎している以外は、光沢のある透明な釉が内外面に施釉される。

皿 (45・46) 45は、VI-1 a類、口縁部の破片である。白灰色を呈す精選された素地で、透明な釉が全体に薄く施釉される。46は、VIII類、底部の破片である。高台径約4.6cm。灰白色を呈すやや粗い感じの素地で、光沢のある透明な釉が内外に施釉されるが、底部の釉は掻き取られる。

壺 (48) II系。口縁部の破片である。口径約11.5cm。白灰色を呈す精選された素地で、透明な釉が全体に薄く施釉される。

下層出土土器 (Fig.16~18 Pla.13~16)

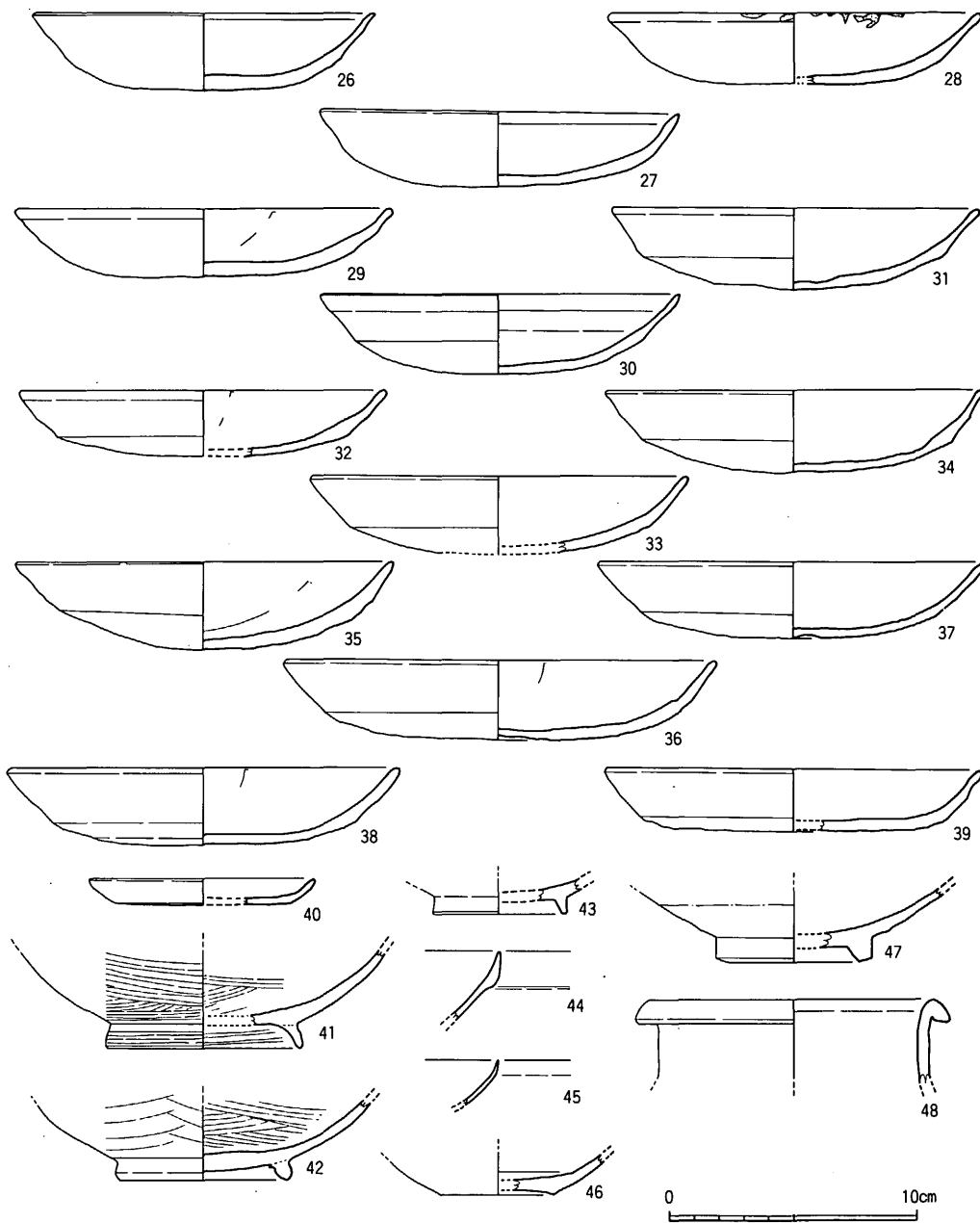


Fig. 15 133SX005中層出土土器 (1/3)

切り離しを行う。口径8.5~9.4cm、器高1.0~1.7cm、底径5.1~7.8cmを測る。調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

土師器

小皿 a (49~61) まず49~58について述べる。49~56はヘラにより、57・58は糸により底部切り離しを行う。口径8.5~9.4cm、器高1.0~1.7cm、底径5.1~7.8cmを測る。調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分は、不定方向のナデで仕上げる。

次に口径のやや大きい59・60・61について述べる。59・60は、ヘラにより底部切り離しを行う。口径10.8~11.0cm、器高1.6~1.8cm、底径7.2~9.0cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分については不定方向のナデによって仕上げている。61は、ヘラにより底部切り離しを行う。口径11.3cm、器高2.3cm、底径5.0cm。内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。これは明らかに丸底坏の手法で制作したもので、分類上小丸底坏となる可能性もある。器形は、体部と底部の境が不明瞭でありかつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプに属す。

丸底坏 a (62~113) いずれもヘラにより底部切り離しを行う。口径14.2~17.1cm、器高2.3~4.2cm、底径6.2~13.9cmを測る。風化等により調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。外面に底部押し出しに伴う指頭痕を残すものもある。器形についてみると、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプ (62~90)、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の坏の原形を残すタイプ (91~108)、さらにその中間のタイプ (109~113) がある。なお、83の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。また99・109には、製作時に生じた亀裂を粘土で補修した痕跡がある。

坏 a (114) ヘラにより底部切り離しを行う。口径15.9cm、器高2.9cm、底径12.8cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整し、見込みの部分には、不定方向の強いナデで仕上げる。

把手 (123) 断面形状がいびつな円形を呈した牛角状の把手である。幅7.2cm、高さ7.7cm、断面最大径4.7cm、取付け部の本体の器壁の厚さは2.2cmを測る。指頭により器面調整され、本体との取付け部は、ナデにより調整されている。この把手は単体で製作されており、のちに本体に取付けられたことがわかる。

瓦器

小皿 a (115) 口径10.9cm、器高1.8cm、底径8.5cmを測り、内外面とヨコナデにより調整し、内面をミガキcで仕上げる。底部はヘラにより切り離した後、板状圧痕が残る。

椀 c 2(116・117) 116は完存している。口径15.6cm、器高4.9cm、高台径7.2cmを測る。内外面ともミガキcで仕上げ、内面見込みには、平行ミガキが2回入る。底部は、ヘラにより切り離した後、板状圧痕が残る。117は、口径16.3cm、器高5.0cm、高台径7.0cmを測る。内外面ともミガ

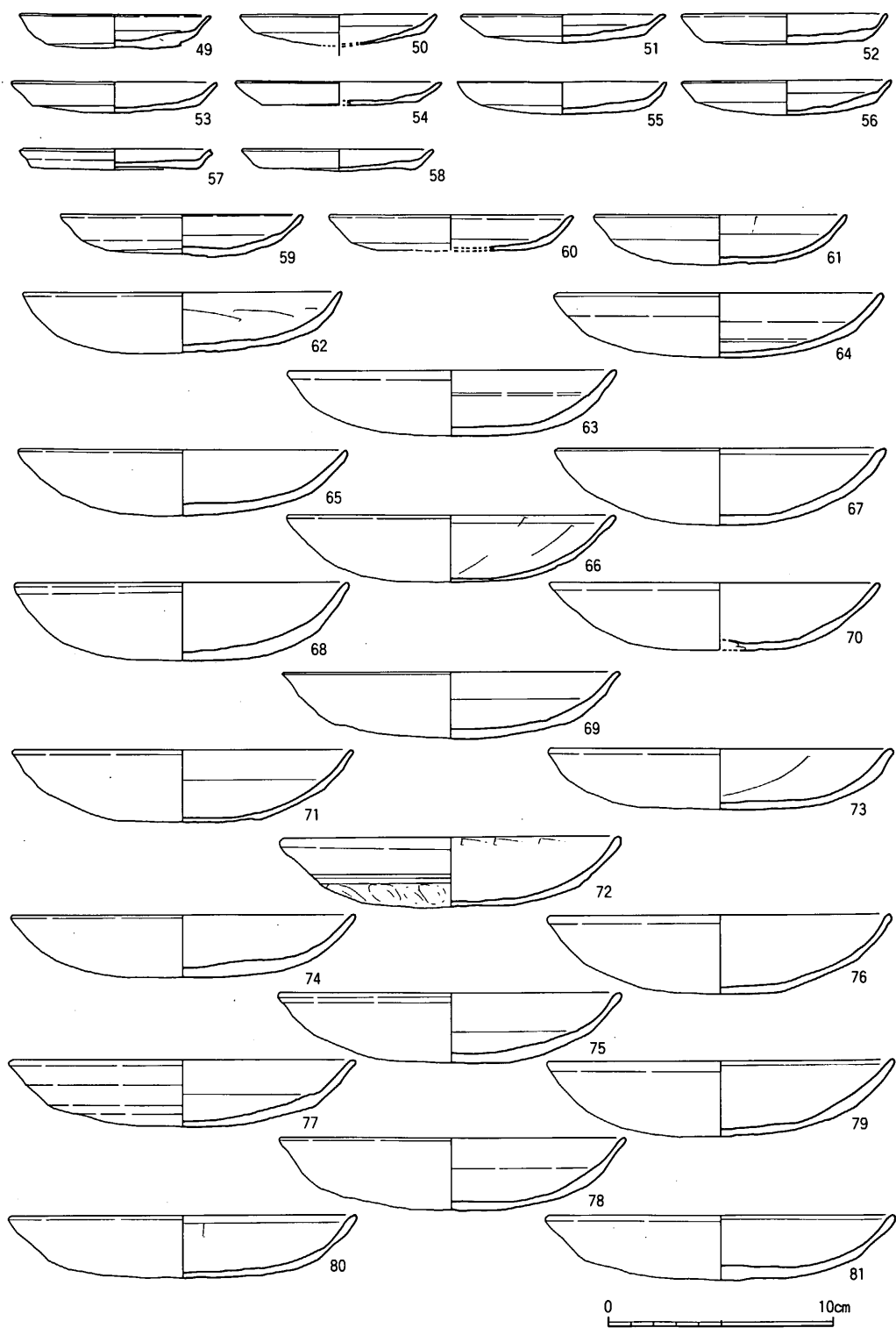


Fig. 16 133SX005下層出土土器 No. 1 (1/3)

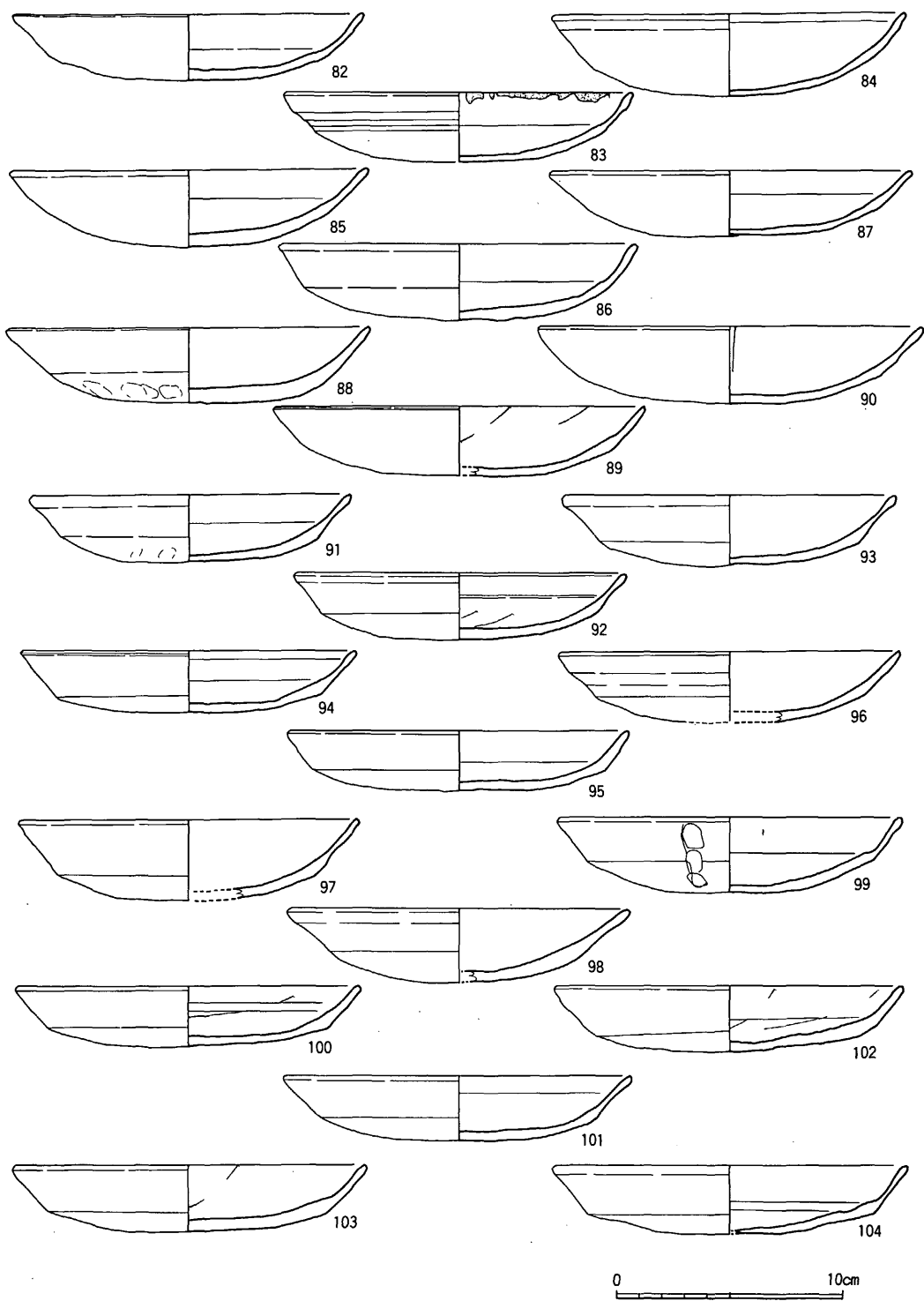


Fig.17 133SX005下層出土土器 No.2 (1/3)

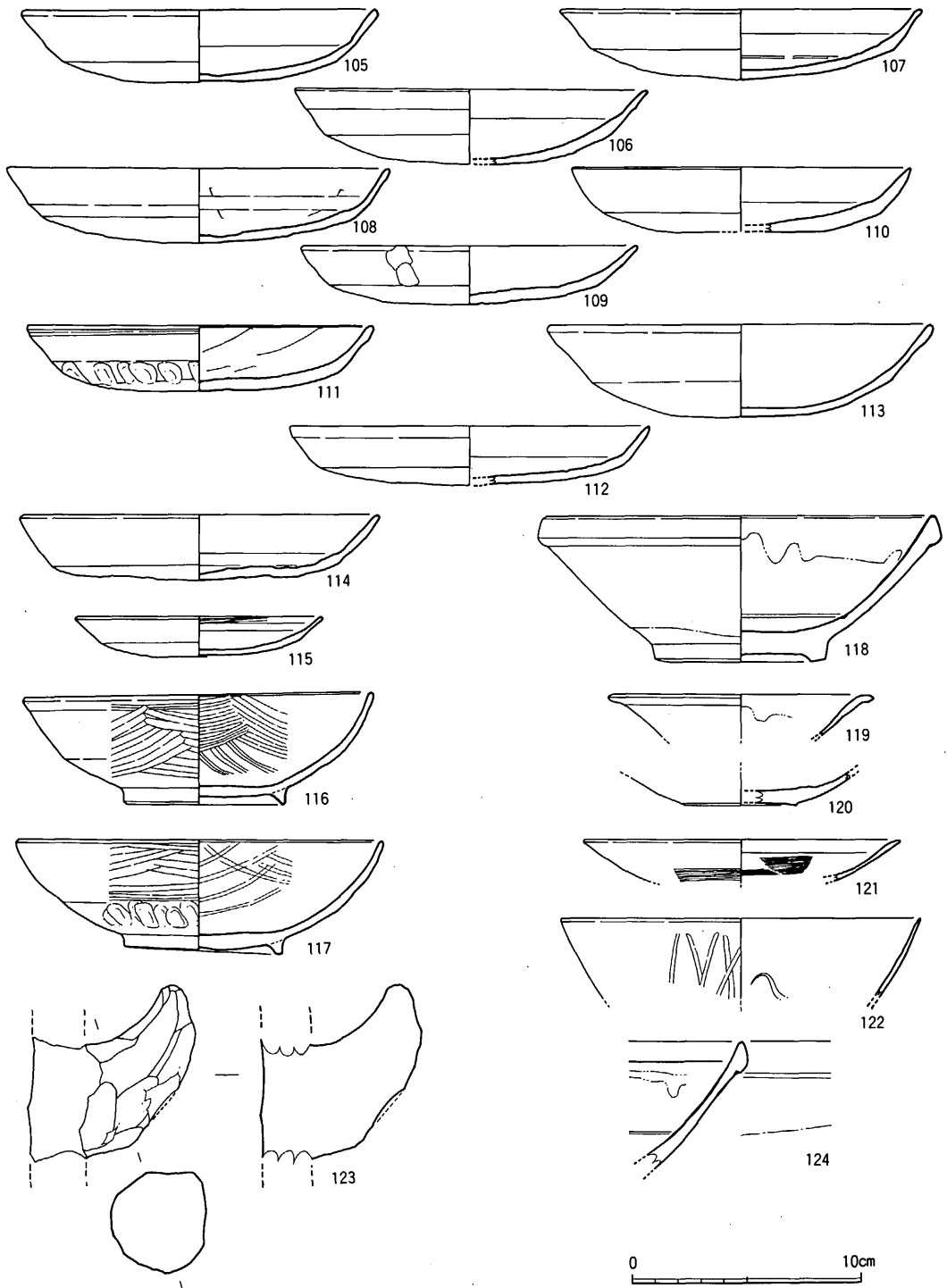


Fig.18 133SX005下層出土土器 No.3 (1/3)

キcで仕上げ、内面見込みには、平行ミガキが入る。体部は押し出しに伴う指頭痕がわずかに観察される。底部は、ヘラにより切り離した後、板状圧痕が残る。

白磁

碗 (118・124) 118は、IV-1a類。口径17.9cm、器高6.5cm、高台径7.6cm。乳白色のやや粗い素地で、灰褐色の釉が厚目に、内外に施釉される。内面では釉垂れしているのが観察される。体部下部は露胎である。124は、IV類、体部から口縁部にかけて残存する破片である。やや茶色を帯びた乳灰色のやや粗い素地で、半透明の釉がやや厚目に、内外に施釉される。内面では釉垂れしているのが観察される。外面下半は、露胎である。

皿 (119~121) 119は、IV-1類、口縁部の破片である。復原口径約11.8cm。黒粒を含んだ灰白色のやや粗い素地で、半透明の釉が厚目に、内外に施釉される。内面では釉垂れしているのが観察される。120は、VII-1b類。底部の破片である。底径約5.0cm。灰褐色の精選された素地で、透明な釉が薄く内外に施釉される。底部は露胎である。121は、VII類、口縁部の破片である。復原口径約14.0cm。灰褐色のやや粗い素地で、薄く緑色を帯びた半透明の釉が、内外に施釉される。内外面に横方向の櫛書きの文様が施されている。

青白磁

碗 (122) 口縁部の破片である。復原口径16.0cm。白灰色の素地で、わずかに青みがかった半透明の釉が、薄く内外面に施釉される。外面は蓮弁状に削り出しがなされており、内面には幅0.2cm程度のヘラで文様が彫り込まれている。なお、破片の一部が当遺構上層でも検出され接合している。

この他、図示しなかったが、灰釉陶器片、越州窯系青磁碗Ⅱ類片、初期高麗青磁Ⅱ類片、中国陶器片等出土している。

ピット及び土壌状遺構出土土器 (Fig.19 Pla.18)

133SX011出土土器

緑釉陶器

坏 (1) 底部の一部が残存する破片である。高台径5.8cm。やや暗い淡緑色の釉が全面にごく薄く施釉している。胎土はごくわずかに雲母や長石等を含むが精良であり、暗灰褐色を呈している。内面には径0.2cm程度の目跡が見られる。その数や配置については小片であるため不明である。洛西産。

133SX044出土土器

越州窯系青磁

小碗 (2) Ⅱ-2 [d?]類。黒粒を含む淡茶赤色のやや粗い素地で、やや暗い淡灰緑色の釉が、ごく薄く内面に施釉される。外面および底部は露胎である。底部は削りだしにより高台状にしているが、作りは雑で、真円を呈していない。底径は3.9cm前後である。

包含層出土土器

茶黒色土層出土土器 (Fig.20 Pla.17)

ここでは、本層の遺存状態が特に良好であったグリッド番号ABC-6・7出土遺物についての報告を行う。

土師器

丸底杯 a (1~6) ヘラにより底部切り離しを行う。口径15.4~18.0cm、器高2.8~3.5cm、底径9.9~14.4cmを測る。風化等により調整不明のものもあるが、いずれも、内外面ともヨコナデにより調整し、内面はミガキbにより仕上げている。器形についてみると、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の杯の原形が残らないタイプ(1)、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の杯の原形を残すタイプ(4)、さらにその中間のタイプ(2・3・5・6)がある。なお、5の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとみられる。

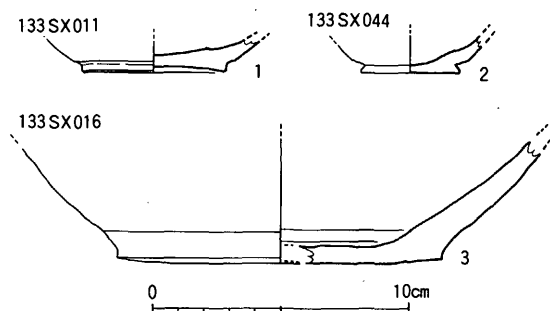


Fig.19 ピット等出土土器 (1/3)

杯 a (7) 糸により底部切り離しを行う。口径16.3cm、器高2.3cm、底径11.0cmを測る。内外面ともヨコナデにより調整している。

緑釉陶器

碗(8) 体部と高台の一部が残存する破片で、淡緑灰色の釉を全体にごく薄く施釉している。胎土は、灰褐色を呈す精選されたもので硬く焼きしまっている。体部下半は回転ヘラケズリで調整しており、高台部はヨコナデにより張り付ける。内面には、手持ちによるミガキの痕跡が不定方向に走っているのが観察される。暗文の可能性もあるが破片資料のため断定できない。復原高台径約13.6cm。

須恵質土器

鉢(9) 東播系の鉢で、口縁の一部をつまんで押し出し片口につくる。胎土は灰褐色を呈し、わずかに砂粒を含むが精良である。

白磁

碗(11・12) 11は、IV-1a類。高台径7.5cm。黒粒を含んだ灰白色のやや粗い素地で、わずかに緑色がかかった半透明の釉が、内外に厚目に施釉される。外部下半は露胎である。12は、II-2×4類。高台径6.6cm。灰白色の精選された素地で、透明な釉が内外に薄く施釉される。高台部

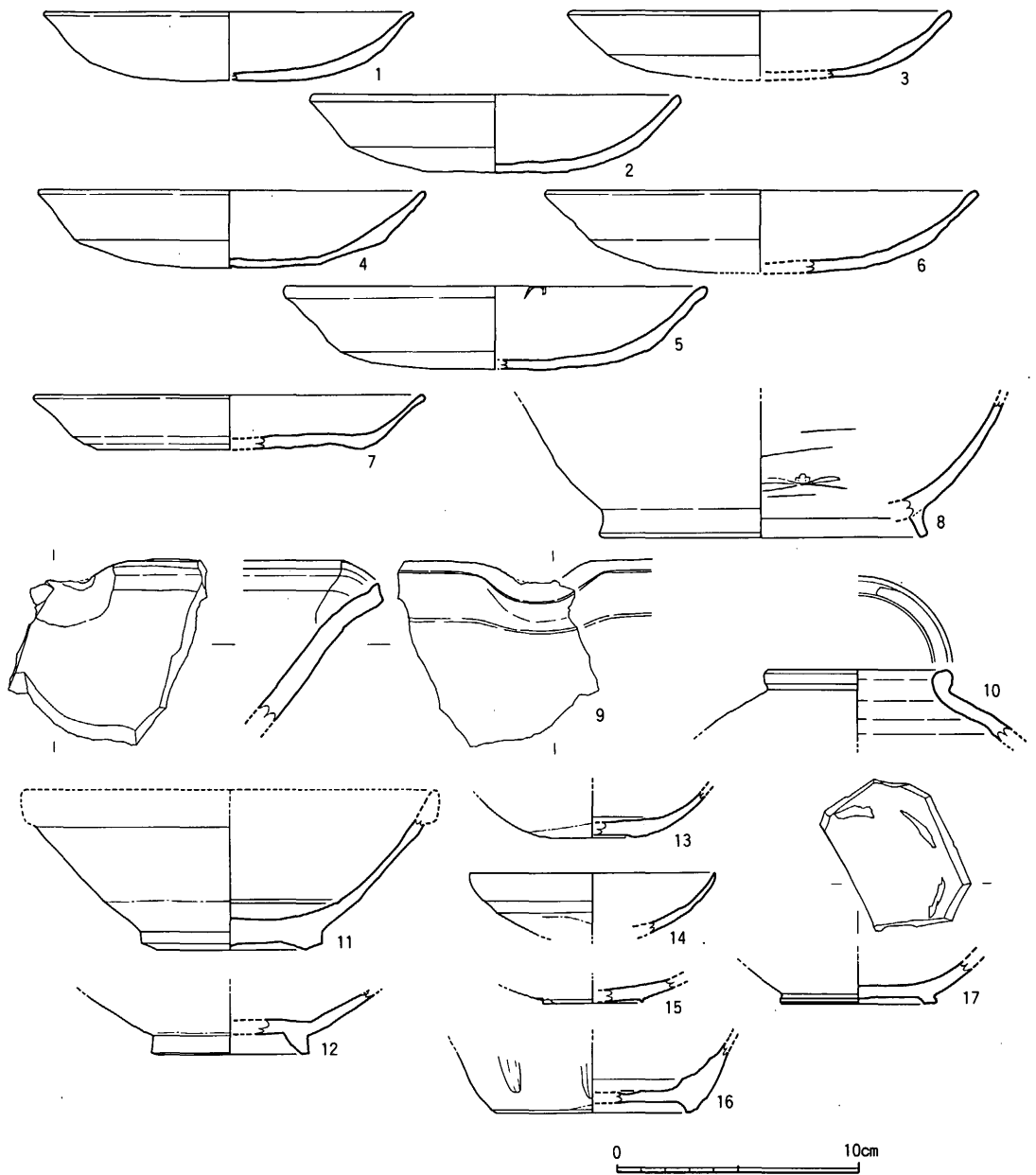


Fig.20 茶黒色土層出土土器（1/3）

及び底部は露胎である。

皿（13～15） 13は、V類。底径4.4cm。灰褐色の良好な素地で、わずかに緑色がかった光沢のある透明な釉が施釉され、底部は露胎である。14は、VI-1a類。口径10.2cm。灰褐色の緻密な素

地で、わずかに緑色がかった透明な釉が施釉され、体部下半は露胎である。15は、Ⅶ類。復原底径約4.2cm。白灰色の緻密な素地で、透明な釉が施釉され、底部は露胎である。

壺(16) Ⅱ系。底径8.5cm。白灰色の精選された緻密な素地で、わずかに緑色がかった透明な釉がごく薄く、外面に施釉される。体部外面には縦に凹みが入り、上からみて輪花状に形作られる。内面及び底部は露胎である。

越州窯系青磁

椀(17) I-2・A類。底径6.5cm。淡オリーブ色の精選された緻密な素地で、灰緑褐色がかった釉がごく薄く全体に施釉される。底部の釉のかかりは特に薄い。内面には目跡がある。

陶器

壺(10) 新I-2類。口縁部の破片である。口径7.8cm。灰褐色の精選された緻密な胎土で、暗緑灰色の釉がごく薄く、内外面に施釉される[釉A、胎土a]。外面の釉のかかりにはムラがある。口縁は丸くおさめ、その上面はわずかに内傾した平らな面をつくっている。そこに目跡とみられる釉が剥離した部分が観察される。

その他の遺物 (Fig.21 Pla.17・18 別表4)

瓦類

各遺構から破片資料として出土しているが、ここでは文字瓦のみを取り上げる。

平瓦(3・4)

3は、「八年」と読むとされるもので、XⅦ類。133SX005上層出土。4は、「平井」でI-5類。133SE050出土。

石製品

砥石(1・2) 両者とも細粒砂岩製。1は三面を研磨している。後に何かに転用されたようで研磨面がかなり削減している。133SD015出土。2は四面を研磨している。一面に断面三角形を呈した溝状の研磨痕がある。133SE045出土。

鉄製品

鉄釘(5～8、10、11) 断面四角形を呈す。頭部を横から叩き鍵状にしているものもある。木質は遺存していない。7・11は完存するが、7は、サビにより原形は不明。5・6は茶黒色土層出土。7・8は133SK001出土。10は133SX005上層、11は133SX005下層から出土。

刀子(12) 柄部のみ残存している。133SX002出土。

不明製品(9) 偏平した金具で、くの字に曲げられている。伸ばすと長さは3.7cm程度になる。133SK001出土。

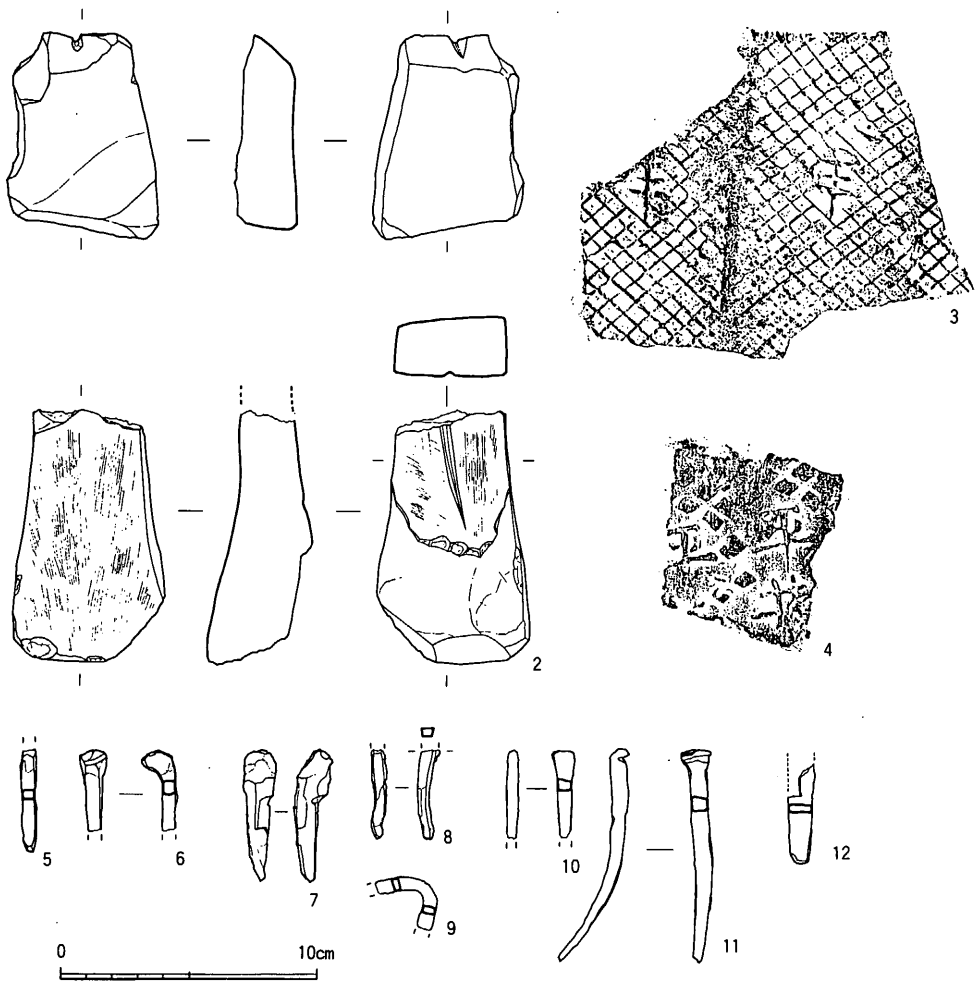


Fig.21 条133出土石製品・瓦類・鉄製品（1/3）

IV. 小 結

今回の調査では、溝、井戸、たまり状遺構のほか、ピット群等を検出した。以下、簡単にまとめ、若干の所見を述べるとともに問題提起を行い、今後の調査成果としたい。すでに前述した所見もあるが、改めてまとめることとする。なお本書中の遺物の編年は、山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」（『中近世土器の基礎研究』IV 1988）等による。

1、各遺構について

まず、主要遺構の所見の補則及びその年代観について述べる。

溝

133SD010

最下層の灰色砂土中から遺物が出土していないため、溝使用時期はわからない。最終埋没土層からの遺物の出土も少なく、混入と見られる遺物も若干含まれるが、溝の最終埋没時期は8世紀後半～末であったと考える。

133SD015

出土遺物には、糸切りによる底部処理を行っている土師器がわずかに含まれており、これらはⅫ期（12世紀前半）の一括資料と考える。よって溝の最終埋没時期をここに求める。これは、出土した陶磁器の年代観にも当てはまる。なお、最終埋没は133SX005に先行しているが、出土土器の様相を比べてみると時期差は確認できない。

井戸

133SE030

ここから出土した土師器小皿 a、丸底坏 a はすべてヘラによる底部処理を行っており、Ⅻ期（11世紀後半～12世紀初頭）のものと考える。よって井戸の最終埋没時期をここに求める。

133SE035

埋土中から9世紀前半代とみられる土師器碗が出土しているが、最下層から9世紀中～後半頃と考えられる土師器碗が出土しており、井戸の廃止、最終埋没時期をここに求める。

133SE040

全体に出土遺物は少ないが、灰砂層から出土した土師器碗 c は、9世紀中～後半のものと考える。なお、この時期は出土した陶磁器の年代観にも当てはまる。よって井戸の最終埋没時期をここに求める。

133SE045

今回報告した出土陶磁器は、いずれも11世紀後半～12世紀前半のものである。その他図示できなかった破片資料に丸底坏片や瓦器碗 c 片等があるが、当期のものとしてよかろう。よって井

戸の最終埋没時期をここに求める。

133SE050

遺物は少なく明確に時期設定を行うことは難しいが、埋没時期を11世紀後半から12世紀前半に求めて差し支えないと考える。

土壌

133SK001

黒色土埋土で、底部ヘラ切り調整された小皿a、丸底坏a等検出されている。いずれもⅫ期（11世紀後半～12世紀初頭）にかけての遺物で、埋没時期をここに求める。

大土壌あるいはたまり状遺構

133SX005

出土した遺物の総数は100点を越える。中には、上層及び下層から出土した破片が接合したものもあり（Fig. 18-122）、土器廃棄後に土層が形成された可能性がある。これは、本遺構出土土器を一括資料とした調査時の所見を裏付けるものと考え。下層出土土器の中に、糸切りにより底部処理を行った土器小皿aがわずかに出土しており、土器の廃棄時期及び最終埋没時期をⅫ期（12世紀前半）と考える。なお、本遺構の上面を覆う茶黒色土層をみると、類似した土器の傾向を有しており、本遺構の最終埋没時期を考える手がかりとなろう。

2、まとめ

ここで、特に出土量の多かった丸底坏aについて、また、朱雀大路に関連する調査区内の遺構の変遷について所見を述べ、まとめとする。

a. 丸底坏aについて

今回の調査では丸底坏aが大量に出土した。個々を観察すると制作手法は一様であるが、器形に若干の違いが見られた。そこで、まとめて出土した丸底坏aの器形についてタイプ分けして報告を行った。

出土した丸底坏aは次の3つに分けた。基本的に1/4以上残存するもので検討している。

A、体部と底部の境が不明瞭であり、かつ器厚は全体的に均厚なもので、底部押し出し前の坏の原形が残らないタイプ

B、体部と底部の境の外面に稜が入り、かつその部分の器厚が最大となるもので、底部押し出し前の坏の原形を残すタイプ

C、1、2の中間のタイプ

Aについては、器壁が平均して薄く、このため重量が比較的軽いものが多く見受けられる。器形は半球に近い形をしており、全体に丁寧な作りをしていることが窺える。Bについては、Aに比べて雑な印象が見受けられ、量産による手抜きが見受けられる印象を受ける。Cについ

Tab. 1 遺構別丸底坏a出土点数

	個体数			口径 (cm)		
	A	B	C	A	B	C
133SD015	8	9	1	14.8~15.6	14.4~16.0	15.2
133SX005全体	39	27	7	14.0~17.1	14.2~17.7	15.0~17.1
133SX005上層	5	2	0	15.0~17.0	15.0~16.0	-
133SX005中層	4	7	2	14.0~15.4	14.6~17.7	15.8~16.0
133SX005下層	30	18	5	14.3~17.1	14.2~17.0	15.0~17.1

では、その中間タイプということでバリエーションがある。全体をみると、大きくAとBに分かれる。Cの中にはAに近いタイプ、Bに近いタイプがあるが、ここではまとめてCとしている。

Aは、丸底坏aのなかでも良品の一群と考えられ、Bは、製品としてはAに劣る一群といえる。土器の優劣は筆者の主観によるものであるが、「丸底坏」と呼ぶこの土器は製作段階で坏の底を丸くしようとする意識が働いていると考え、このタイプの違いは当然認めてよいと考える。

丸底坏aは各遺構から出土しているが、特に丸底坏aの出土が多かった133SX005と133SD015についてA、Bの割合をみってみる。133SX005は、上中層合わせて1対1、下層は15対9でAタイプが多い。133SD015はほぼ1対1である。

遺構毎に若干の差はあるが、同一遺構においてはA B両者とも比率はあまり変わらない。また、タイプ毎の口径の法量の傾向をみても両者とも大差がないようである。

丸底坏の器形に大きく2タイプあることに着眼しタイプ分けを行ったが、このタイプの差について今回は結論には至らなかった。後考に委ねることとして、今回はデータの提示に留めておく。(Tab.1参照)

b. 朱雀大路について

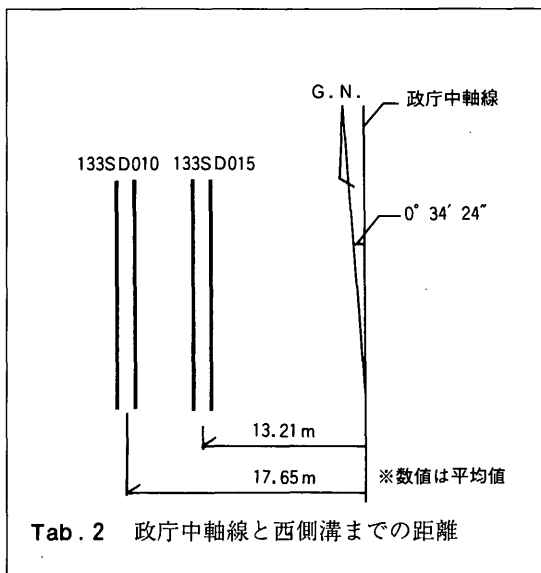
今回の調査の最大の成果は、大宰府の推定朱雀大路西側溝（以下、西側溝）が検出されたことである。推定朱雀大路関連の遺構は、当市および筑紫野市における大宰府条坊跡の発掘調査で、これまで東側溝が第64・142次調査（太宰府市）で、西側溝が第107次調査（筑紫野市）で検出されている。これらの成果を基にした朱雀大路関係の総合評価は後考に委ねるが、ここでは今次調査における所見とまとめを記す。なお、今回検出した西側溝に関する座標値等は、Tab. 2及び別表を参照していただきたい。

本調査の最も古い遺構は、奈良時代の西側溝と考える133SD010とその西に展開するビット群

の一部である。奈良時代の遺構は133SD010の東側には展開していない。このことは133SD010の東側を道路の路面部分と考える根拠の一つである。これから推定される朱雀大路の幅は、約35.5m（溝心までの距離を中軸線で折り返した数値）となる。

133SD010の北端は調査区内で切れており、その延長上にある133SX020が溝として続くと考えている。朱雀大路側溝が一本の溝ではなく、連続した溝である可能性を今回の調査で得られたことは主要な成果である。ただし、この位置で西側溝を切り、陸橋を造った理由については今回の調査ではわからなかった。今後の周辺の調査により解明されるであろう。

133SD010は8世紀後半～末には人為的に埋め戻しされる。この後朱雀大路は縮小化の道をたどることとなる。まず、井戸が路面の一部に侵出してくる。133SE035、133SE040がそれである。特に133SE040の侵出が大きく、133SD010



Tab. 2 政府中軸線と西側溝までの距離

から東に約4.5mの位置に造られている。ただし、朱雀大路の空間は基本的に保持されており、道路としての機能は失われていないようである。これらが掘削された時期については、それを示す遺物の出土や他の遺構との切り合い関係はなかったためはっきりしないが、井戸の最終埋没時期から遡り、9世紀前半から中頃であると考えられる。

井戸は、9世紀中頃から後半にかけて廃絶するが、その後133SE040の真上を通るように133SD015が掘削されている。この溝と133SD010の間にはピット等が若干掘削されているが、これ以东には遺構がないことを考慮すると、9世紀代に設定された朱雀大路の路面幅は、その後133SD015存続時期まで変化がなかった可能性も考える必要がある。この時の朱雀大路の幅は、推定約26.4m（溝心までの距離を中軸線で折り返した数値）となる。

133SD015の掘削時期はわからないが、廃絶したのはⅫ期（12世紀前半）である。133SD015廃絶頃、井戸やピットが再び朱雀大路の路面部に侵出してくる。ただし遺構は少なく、また133SE045付近から東に約3mは遺構を検出していない。このことから道路としての空間は狭いながらも確保されていた可能性もあろう。

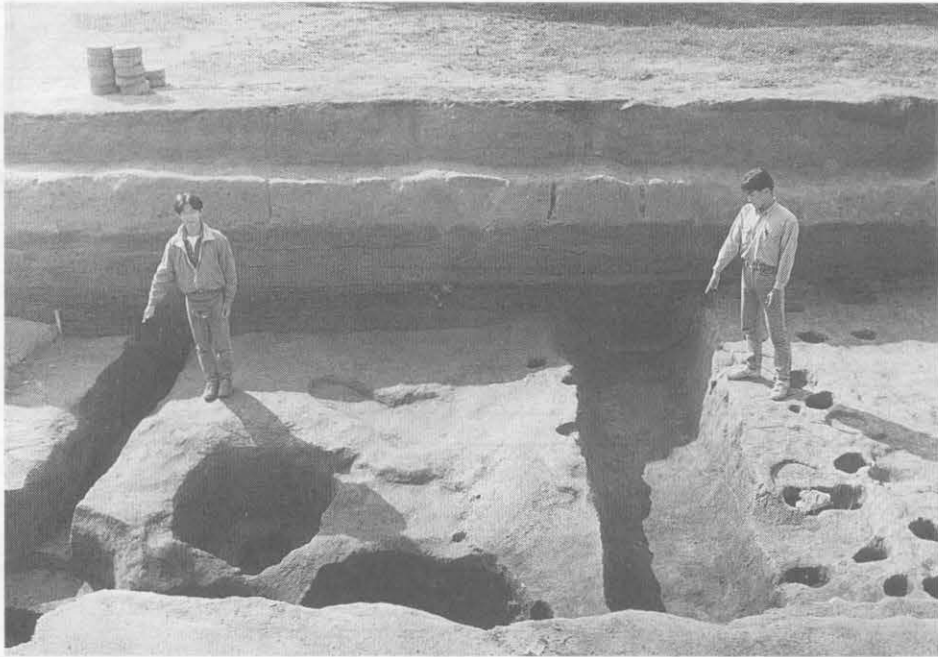
以上、本次調査における朱雀大路の変遷について簡単に所見を述べた。大宰府の道路において8世紀後半から末に側溝が埋まり、9世紀中頃から後半に規模の縮小がおこるのは、朱雀大路だけでなく、水城西門を通る官道の調査でも同様の所見が得られている。奈良時代前半頃にお

いて、この官道と朱雀大路は大宰府政庁に至る一連のルートと考えられており、側溝の埋め戻し、路面の縮小、衰退が始まる時期が軌を一にしているところは興味深い。

今回の調査区は狭小であり、十分な資料が得られたわけではなく、推測部分を含んだまま所見を述べたが、周辺の調査・整理により、今後朱雀大路に関する明らかになっていくものと思われる。

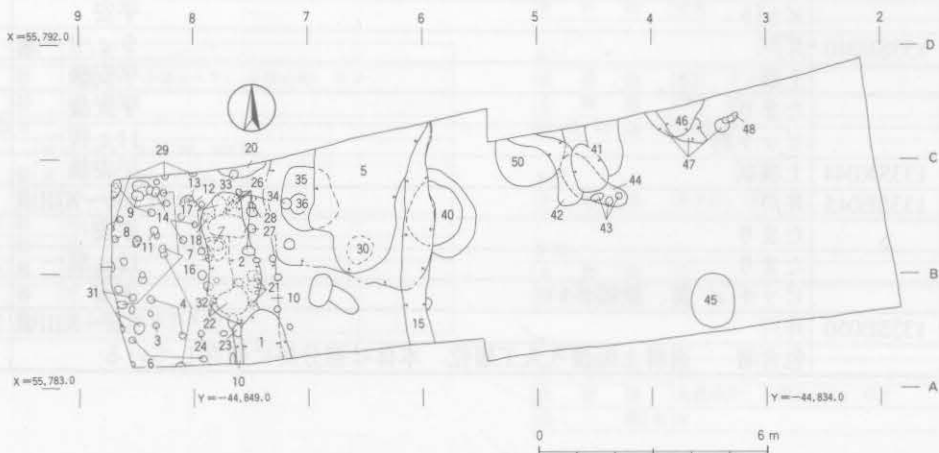
<参考文献>

『太宰府市史 考古資料編』太宰府市史編集委員会 1992年 他



133SD015(左)と133SD010(右)(北から撮影)

大宰府条坊跡 第133次調査 遺構配置図 (1/200)



※破線は、上層遺構完掘後に検出された遺構。一点破線内は、茶黒色土の残りが特に良好であった部分。

別表1 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種 別	地区
1	133SX001	土壌か 黒色土埋土	～XII A7
2	133SX002	たまり 茶黒色土埋土 133SX002→133SX001	11c後～ AB7
3		ピット	平安後 A8
4		ピット群	平安 AB8
5	133SX005	たまり状	XIII BC6
6		ピット群	平安 A7～8
7		ピット群	平安 AB8
8		ピット	11c後～ B8
9		ピット群	平安 B8
10	133SD010	溝 朱雀大路西側溝	8c後 AB7
11	133SX011	ピット	平安 B8
12		ピット	平安 B7～8
13		ピット	平安 B8
14		ピット群	12c～ B8
15	133SD015	溝	～XIII 6ライン
16	133SX016	ピット	平安 B7
17		ピット群	平安 B7
18		ピット	平安後か B7
19		土壌群	平安 B7
20	133SX020	溝か 淡灰黄色粘土埋土 133SD010に続く溝と考える	奈良か? B7
21		ピット群 133SD010に切り込む 遺物が混入しているか	平安 A7
22		ピット群	10c～ A7
23		ピット	平安 A7
24		ピット	平安 A7
26		ピット群	平安 B7
27		ピット 133SD010に切り込む 奈良時代の遺物多い	平安 B7
28		ピット 133SX028→133SX026	平安後 B7
29	133SX029	ピット群	11c後～ B8
30	133SE030	井戸	～XII B6
31		ピット群	奈良か AB8
32	133SX032	ピット群	平安 AB8
33		ピット 133SX020の遺物が混入しているか	奈良? B7
34		ピット 133SE035の遺物が若干混入しているか	平安 B7
35	133SE035	井戸	9c中～後 B6～7
36		ピット	平安 B7
40	133SE040	井戸	9c中～後 B5
41		土壌	平安後 BC4
42		たまり	平安後 BC4
43		ピット群	11c後～ B4
44	133SX044	土壌状	平安後 B4
45	133SE045	井戸	XII～XIII頃 A3
46		たまり	平安 C3
47		たまり	12c前～ C3
48		ピット 釘、鉄器多い	平安 C3
50	133SE050	井戸	XII～XIII頃 BC4～5
	茶黒色土	包含層 遺構上面覆う人工層位 本体は部分的に残存している	全面

別表2 出土遺物一覽表

S-1

須 恵 器	坏片、蓋3、カメ
土 師 器	碗 c、丸底坏a、小皿d? 小皿a、カメ片
黒色土器B	碗片
越州窯系青磁	碗 I-2ウ
白 磁	碗 IV、XI-5、XII-1b、不明〔良質な一群〕 皿 VII-1?
灰釉陶器	山茶碗、灰釉陶器〔0-53?〕
中国陶器	壺; A'a
瓦 類	片
金属製品	鉄釘(1)、不明鉄器(1)、不明鉄製品(1)

S-2

須 恵 器	坏a、カメ、蓋3
土 師 器	丸底坏a
黒色土器B	片
越州窯系青磁	皿 II
白 磁	碗 IV、IV~V 他 碗×皿II系、片
金属製品	刀子?片(1)

S-3

土 師 器	丸底坏a
瓦 類	片
土 製品	焼土塊

S-4

白 磁 他	片
灰釉陶器	鉢

S-5上層

須 恵 器	カメ片、蓋3、坏片
土 師 器	丸底坏a、小皿a(ヘラ)、(糸)、カメ片
瓦 器	碗片、片
黒色土器A	碗 c
越州窯系青磁	碗 II
白 磁	碗 片、II、IV、IV-1、IV~V、XIII 皿 II~III、VI 他 不明片
青 白 磁	碗(蓮華文あり)、皿(輪花あり)
須 恵 質 土 器	鉢(東播)
瓦 類	片、片(格子目)、無文セン
金属製品	鉄釘(1)
土 製品	生産用具片

S-5中層

須 恵 器	カメ片
土 師 器	丸底坏a、小皿a(ヘラ)、小皿a(糸)、カメ
瓦 器	碗、碗 c
黒色土器B	碗
白 磁	碗 II-1×3、II-5、IV、VII? 皿 V~VII、VI、VI-1a、VIII 他 IV~VIII、壺II類
緑釉陶器	坏(長門)
瓦質土器	鉢
中国陶器	Ea〔壺III?〕
瓦 器	片
土 製品	焼土塊、生産用具?片

S-5下層

須 恵 器	カメ 坏a
土 師 器	丸底坏a、小皿a(ヘラ)、小皿a(糸)、把手
瓦 器	小皿a、碗 c、碗 c 片
黒色土器A	碗 c
越州窯系青磁	碗 II-3a
龍泉窯系青磁	碗 I×III
高麗青磁	皿 II
白 磁	碗 片、II-1、IV、IV-1a、VI-1b、V、V-2b V? V-3a、V~VII、VIII、不明(良質な一群) 皿 IV-1、VI、VII-1b、不明(良質な一群) 他 碗×皿II系、片
灰釉陶器	壺?片
中国陶器	壺類; B'a 褐釉壺; B'a
弥生土器	壺底部
金属製品	鉄釘(1)
土 製品	土製品、焼土塊、ルツボ?

S-6

須 恵 器	カメ片
土 師 器	坏片、カメ片
白 磁 皿	V~VII
金属製品	鉄釘

S-7

須 恵 器	カメ片
土 師 器	カメ片、小皿a片、坏片
黒色土器A	碗片

S-8

土 師 器	丸底坏a、坏 c 片
白 磁 碗	V-2b

S-9

須 恵 器	カメ
土 師 器	坏

S-10

須 恵 器	坏片、蓋? 片
土 師 器	カメa、蓋片、蓋3片 10c頃の遺物の混入あり 焼埴壺(1)
黒色土器A	片(混入か)
黒色土器B	片(混入)
土 製品	不明筒状品
そ の 他	骨片

S-11

須 恵 器	壺片、カメ片
土 師 器	坏片、碗 c 片
緑釉陶器	坏(洛西)

S-12

土 師 器	カメ片、坏片
-------	--------

S-13

土 師 器	片
黒色土器A	片、碗 c 片

S-14

須 恵 器	片
土 師 器	丸底坏片、小皿片(糸?) 坏片
白 磁 他	片

S-15

須 恵 器	カメ、坏片、壺片
土 師 器	丸底坏a、小皿a(ヘラ)、碗c、丸底坏a(糸) カマド、カメ片、器台
瓦 器	碗c、片
黒色土器B	碗片
越州窯系青磁	碗 I
白 磁	II、II-1、II-3×4、IV、V、V-2、V-2b V-3
他	片、小壺蓋II
瓦 類	片
金属製品	鋳滓(2)
石製品	砥石、滑石片
土製品	焼土塊(1)

S-16

土 師 器	坏片
須恵質土器	鉢片

S-17

須 恵 器	鉢?片
土 師 器	坏a片

S-18

須 恵 器	坏片
土 師 器	片
瓦 器	瓦器?片
白 磁 他	片
青 白 磁	青白磁?碗×皿

S-19

土 師 器	坏片、カメ片
黒色土器A	片
土 製 品	焼土塊

S-20

土 師 器	片
-------	---

S-21

須 恵 器	坏片、カメ片
土 師 器	カメ、坏a

S-22

土 師 器	碗、カメ、坏a
-------	---------

S-23

土 師 器	坏片、カメ片
-------	--------

S-24

須 恵 器	カメ片
土 師 器	坏片

S-26

土 師 器	小皿a(ヘラ)、碗c、カメ片
-------	----------------

S-27

須 恵 器	片
土 師 器	坏a片、カメ、坏片
黒色土器A	碗
瓦 類	片

S-28

須 恵 器	カメ、坏片
土 師 器	カメ、坏片、丸底坏a

S-29

須 恵 器	カメ、把手片
土 師 器	小皿a片
黒色土器B	碗c片

S-30

須 恵 器	カメ
土 師 器	坏c、丸底坏a、小皿a(ヘラ)、カメ
瓦 器	碗c
高 麗 青 磁	I-1
白 磁	碗 IV
他	片
瓦 類	無文セン、片

S-30最下層

土 師 器	小皿a(ヘラ)、丸底坏a、カメ片
白 磁 碗	IV
瓦 類	片
土 製 品	ルツボ

S-31

須 恵 器	蓋3、カメ
土 師 器	坏d

S-32

土 師 器	カメb、坏片
瓦 類	片

S-33

土 師 器	蓋c、カメ
-------	-------

S-34

須 恵 器	カメ
土 師 器	カメ、小皿a(ヘラ)、坏片

S-35埋土

須 恵 器	カメ、坏c、坏片
土 師 器	カメ、碗c、坏a
黒色土器A	碗片
龍泉窯系青磁	碗 I×III
緑 釉 陶 器	小碗(京都産か)
瓦 類	片(格子、縄目)
金属製品	鉄釘?
石製品	滑石製品
土製品	焼土塊、生産用具?(米粒状痕あり)
その他	骨片

S-35灰黄色粘土

須 恵 器	カメ
土 師 器	カメa、碗c、高坏、小カメ、坏
黒色土器A	碗c片
越州窯系青磁	碗 I、II
土 製 品	生産用具?片

S-35枠内

須 恵 器	坏c
土 師 器	カメ、碗c、坏a 9c前半の資料含む

S-36

須 恵 器	カメ 坏c片
土 師 器	カメ、小皿a(ヘラ)、碗c
白 磁 他	碗×皿II系、片
瓦 類	片

S-37

土師器	片
黒色土器B	片

S-40灰色砂

須恵器	カメ、壺
土師器	碗c
黒色土器A	碗片
越州窯系青磁	碗II
瓦類	片

S-40枠内

土師器	カメ、坏片
黒色土器A	碗片
瓦類	片

S-40最下層

土師器	カメa
瓦類	片

S-41

須恵器	カメ
土師器	片、カメ
白磁皿	VI
瓦類	片

S-42

須恵器	坏c、カメ
土師器	坏片
白磁碗	IV、V、V-1か
瓦類	片

S-43

須恵器	カメ片、片、蓋3片
土師器	カメ片、坏片
黒色土器A	碗c片
白磁他	片

S-44

須恵器	坏c、蓋3
土師器	坏片、カメ片
黒色土器A	碗片
越州窯系青磁	碗小碗II-2 [d?]
白磁碗	IV
	皿VIII?
中国陶器	甌I?b
瓦類	片

S-45

須恵器	カメ、蓋c、壺片、坏c片
土師器	碗c、丸底坏a片、小皿片、小皿a、丸底坏、カメ
瓦器	碗c片
高麗青磁	I×II
白磁碗	片、V-1、V-2b、V-3? VIII-1?? XIII
	不明 [良質な一群]
	皿片、皿?
	他片、甌?
中国陶器	褐釉? ; Ea (甌III?)
瓦類	片(格子)

S-46

須恵器	カメ片
白磁他	片
瓦類	片(細目)

S-47

須恵器	カメ、坏c
土師器	坏片(糸)、カメ片
白磁他	片
瓦類	片(細目)

S-48

須恵器	坏片、カメ片
土師器	坏片、カメ片
瓦類	片(格子)

S-50

須恵器	カメ片
土師器	丸底坏片、坏a片、小皿a(へら)、碗c、カメ
瓦器	碗片、瓦器?
越州窯系青磁	碗II-3a
白磁他	碗IV、V-1、V-3
瓦類	片(「平井」銘入り)
金属製品	鉦袴(1)

表土

須恵器	カメ片、坏c
土師器	器台、丸底坏a、小皿a(へら)
瓦器	碗c
越州窯系青磁	碗I
龍泉窯系青磁	碗I-5b?
白磁他	碗V-1? V、IV、V-2
	皿II、VI-1b
	碗×皿II系、片
瓦類	片

茶黒色土

須恵器	カメ、坏片、蓋c、坏c、壺
土師器	丸底坏a、碗c片、鉢、坏a(米)
瓦器	瓦器?片
越州窯系青磁	碗I-2ア
	他II
龍泉窯系青磁	碗I-5b?
高麗青磁	I×II、O×白V?(外タテヘラ、内ヘラ文)
白磁碗	II、II-2×4、IV、IV-1a、IV~V、VI、XIII
	V-3bか [外タテクシ]
	皿皿? V、VI、VI-1a、VII
	他片、碗×皿II、壺II
緑釉陶器	大碗(猿投?)、片(長門)
須恵質土器	片口鉢
中国陶器	甌; 新I-2(Aa)
瓦類	片
金属製品	鉄釘?(1)、鉄釘(3)

別表3 土師器法量表

A.番号 B.挿図番号 C.内底のナアの有無 D.板状圧痕の有無
単位: cm

133SD015

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	1	8.8	1.3	6.9	○	×
	2	2	9.0	1.3	7.3	○	○
	3	3	9.0	1.4	7.0	?	○
	4	4	9.4	1.4	7.2	-	○
小皿a (糸)	1	5	9.4	1.4	6.6	○	○
丸底坏a (ヘラ)	1	6	14.8	3.3	11.8	-	×
	2	7	15.0	3.2	11.9	-	○
	3	8	15.0	3.3	-	-	○
	4	9	15.0	3.4+	6.1	-	○
	5	10	15.2	3.4	11.6	-	○
	6	11	15.5	3.5	12.7	-	○
	7	-	15.6	3.0+	12.5	-	○
	8	12	15.6	3.5	12.6	-	○
	9	13	14.4	3.0	10.2	-	○
	10	14	14.6	2.9	10.7	-	○
	11	15	15.0	3.3	12.0	-	○
	12	16	15.2	2.9	12.5	-	○
	13	17	15.3	3.1	11.6	-	○
	14	18	15.6	3.5	10.0	-	○
	15	19	16.0	2.9	13.0	-	○
	16	20	15.2	2.8	12.8	-	○
丸底坏a (糸)	1	21	15.4	4.1+	10.4	-	-
	2	22	15.6	3.1+	10.8	-	○

133SK001

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	1	9.2	1.0	7.5	○	○
	2	2	10.9	1.5	8.0	?	○
丸底坏a (ヘラ)	1	3	15.7	3.6	10.8	-	○
	2	4	15.5	3.8	12.3	-	×

133SE030埋土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	1	9.0	1.2	7.5	○	○
	2	2	9.4	1.4	6.6	○	○
皿c	1	3	12.6	2.8	4.1	○	×
丸底坏a (ヘラ)	1	4	14.6	3.1	9.8	-	○
	2	5	15.0	3.2	11.5	-	○

133SE030最下層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	10	9.1	1.2	7.1	○	○

133SE035埋土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
坏c	1	1	-	-	(7.3)	-	×
碗c	2	2	-	-	7.4	○?	×

133SE035枠内

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
碗c	1	9	14.9	5.6	8.4	○	×

133SE040灰色砂

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
碗c	1	1	17.0	5.0	(8.3)	?	×

133SE050

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	6	8.9	1.4	7.2	○	○

茶黒色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
丸底坏a (ヘラ)	1	1	15.4	2.9	11.5	-	×
	2	2	15.4	3.3	11.0	-	○
	3	3	16.0	2.8	9.9	-	○
	4	4	16.1	3.3	12.9	-	○
	5	5	17.6	3.4	14.0	-	○
	6	6	18.0	3.5	14.4	-	○
坏a (ヘラ)	1	7	16.4	2.3	11.0	×	○

133SX005上層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	1	9.0	1.2	7.2	○	○
	2	2	9.2	1.2	6.8	○	○
	3	3	9.4	1.2	6.8	○	○
	4	4	9.4	1.5	7.5	○	○
小皿a (糸)	1	5	8.5	1.2	5.3	○	?
	2	6	9.4	1.0+	8.0	○	○
	3	7	9.5	1.1	7.7	○	○
丸底坏a (ヘラ)	1	8	15.0	2.6	12.0	-	○
	2	9	15.0	3.5	11.4	-	○
	3	10	15.7	2.4	12.4	-	○
	4	11	17.0	3.6	12.7	-	○
	5	12	15.0	3.1	11.9	-	○
	6	13	16.0	2.6	12.7	-	○
丸底坏a (糸)	1	14	16.0	3.3	13.5	-	○

133SX005中層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
丸底坏a (ヘラ)	1	26	14.0	3.2	11.2	-	○
	2	27	14.6	3.1	12.2	-	○
	3	28	15.2	2.9	11.8	-	×
	4	29	15.4	2.8	11.8	-	○
	5	30	14.6	3.3	11.8	-	○?
	6	31	14.9	3.4	12.1	-	○?
	7	32	15.0	2.7	12.2	-	○
	8	33	15.4	3.2+	12.2	-	○
	9	34	15.4	3.4	12.7	-	○
	10	35	15.4	3.6	11.9	-	○
	11	36	17.7	3.3	14.6	-	○
	12	37	15.8	3.1	11.3	-	○
	13	38	16.0	3.2	12.4	-	○
小皿a (ヘラ)	1	40	9.2	1.1	7.1	×	○
坏a (ヘラ)	1	39	15.4	2.6	12.5	-	○

133SX005下層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿a (ヘラ)	1	49	8.5	1.7	5.1	○	○
	2	50	8.8	1.4	7.7	○?	○
	3	51	9.2	1.3	7.0	○?	○
	4	52	(9.2)	1.4	7.1	○	○
	5	53	9.2	1.4	7.2	○	○
	6	54	9.3	1.1	7.3	?	?
	7	55	9.4	1.5	7.7	?	?
	8	56	9.4	1.6	7.8	○	○
小坏a (ヘラ)	1	59	10.8	1.8	7.2	○	○
	2	60	11.0	1.6	9.0	○	○
	3	61	11.3	2.3	5.0	-	○
小皿a (糸)	1	57	8.6	1.0	7.4	○	×
	2	58	8.6	1.0	6.9	○	○

133SX005下層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
丸底環a (ヘラ)	1	62	14.3	2.7	11.2	-	○
	2	63	14.7	3.0	7.0	-	○
	3	64	14.8	2.9	11.6	-	○
	4	65	14.8	3.0	12.8	-	○
	5	66	14.8	3.1	11.3	-	○
	6	67	14.8	3.4	6.7	-	○
	7	68	15.0	3.5	12.3	-	○
	8	69	15.2	3.0	9.6	-	○
	9	70	15.2	3.0	10.7	-	○
	10	71	15.2	3.3	12.9	-	○
	11	72	15.3	3.2	12.9	-	○
	12	73	15.4	2.3	9.4	-	○
	13	74	15.4	2.8	11.7	-	○
	14	75	15.4	3.2	12.3	-	○
	15	76	15.4	3.6	6.2	-	○
	16	77	15.5	3.0	9.6	-	○
	17	78	15.5	3.3	12.0	-	○
	18	79	15.5	3.4	12.4	-	○
	19	80	15.6	2.9	12.0	-	○
	20	81	15.6	2.9	12.6	-	○
	21	82	15.6	3.0	11.3	-	○
	22	83	15.6	3.1	9.7	-	○
	23	84	15.8	3.7	13.0	-	○
	24	85	16.0	3.4	13.3	-	○
	25	86	16.0	3.4	13.6	-	○
	26	87	16.1	2.9	13.1	-	○
	27	-	16.1	3.3	12.4	-	○

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
丸底環a (ヘラ)	28	88	16.2	3.4	12.9	-	○
	29	89	16.5	3.1	11.3	-	○
	30	90	17.1	3.5	11.8	-	○
	31	91	14.2	3.0	10.1	-	○
	32	92	14.8	3.0	12.0	-	○
	33	93	14.8	3.2	11.5	-	○
	34	94	15.0	2.8	11.8	-	○
	35	95	15.2	2.7	13.0	-	○
	36	96	15.2	(3.2)	12.0	-	○
	37	97	15.2	3.6	11.4	-	○
	38	98	15.3	3.4	11.5	-	×
	39	99	15.3	3.4	12.7	-	○
	40	100	15.4	2.7	12.6	-	○
	41	101	15.4	2.9	10.8	-	○
	42	102	15.5	2.9	12.0	-	○
	43	103	15.8	3.0	12.5	-	○
	44	104	15.8	3.0	12.6	-	○
	45	105	15.8	3.2	12.2	-	○
	46	106	15.8	3.3	12.9	-	○
	47	107	16.0	3.2	13.5	-	×
	48	108	17.0	3.4	13.9	-	○
	49	109	15.0	2.7	12.0	-	○
	50	110	15.0	2.9	12.3	-	○
	51	111	15.3	3.0	10.3	-	○
	52	112	16.0	2.6	13.4	-	○
	53	113	17.1	4.2	13.2	-	○
環a (ヘラ)	1	114	15.9	2.9	12.8	-	○

別表4 鉄製品計測表

遺構番号	種別	長さ	幅1	幅2	遺物番号
茶黒色土層	鉄釘	4.1+	0.5	0.4	Fig.21-5
	鉄釘	3.3	0.5	0.6	Fig.21-6
133SK001	鉄釘	5.3	1.3	1.3	Fig.21-7
	鉄釘	3.6+	0.4	0.5	Fig.21-8
	不明鉄製品	(3.7)	0.5	0.3	Fig.21-12
133SX005上層	鉄釘	3.5	0.6	0.5	Fig.21-9
133SX005下層	鉄釘	8.5	6.5	6.5	Fig.21-10
133SX002	刀子	4.0+	1.0	0.4	Fig.21-11

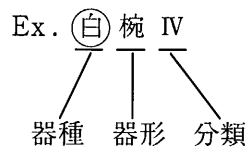
別表5 溝座標値

遺構番号	計測地点	遺構中点座標値		方位 (計測振れ)	南門からの距離	
		X	Y		X方向 (m)	Y方向 (m)
133SD010	北端	55,788.25	-44,847.73	GN-3° 12' 59" -W	-920.65	-17.79
	南端	55,784.00	-44,847.49		-924.90	-17.51
133SD015	北端	55,790.13	-44,843.20	GN-0° 48' 23" -W	-918.72	-13.28
	南端	55,784.38	-44,843.12		-924.48	-13.14
133SX020	任意中点	55,789.09	-44,847.84	GN-3° 51' 45" -W (133SD010南端から計測)	-919.82	-17.91

※南門からの距離は、政庁中軸線 (N-0° 34' 24" -E) を基準とした値である。

PLATE

※ 遺物写真のなかの一部に略号を用いているが、以下のとおりである。



- | | | | |
|---|---------|---|-----------|
| ① | ．．．灰釉陶器 | ② | ．．．越州窯系青磁 |
| ③ | ．．．緑釉陶器 | ④ | ．．．初期高麗青磁 |
| ⑤ | ．．．白磁 | ⑥ | ．．．陶器 |



調査区上空から大宰府政庁を望む



大宰府条坊跡第133次調査区遠景（上が北）

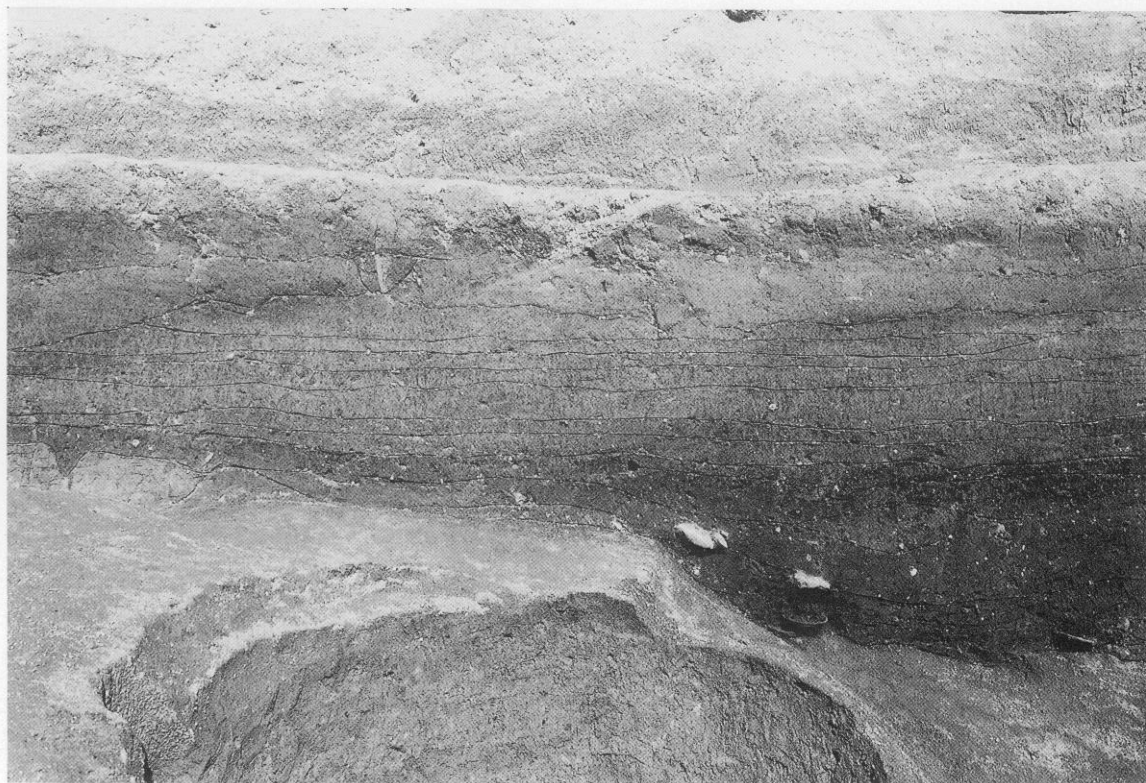
Pla. 2



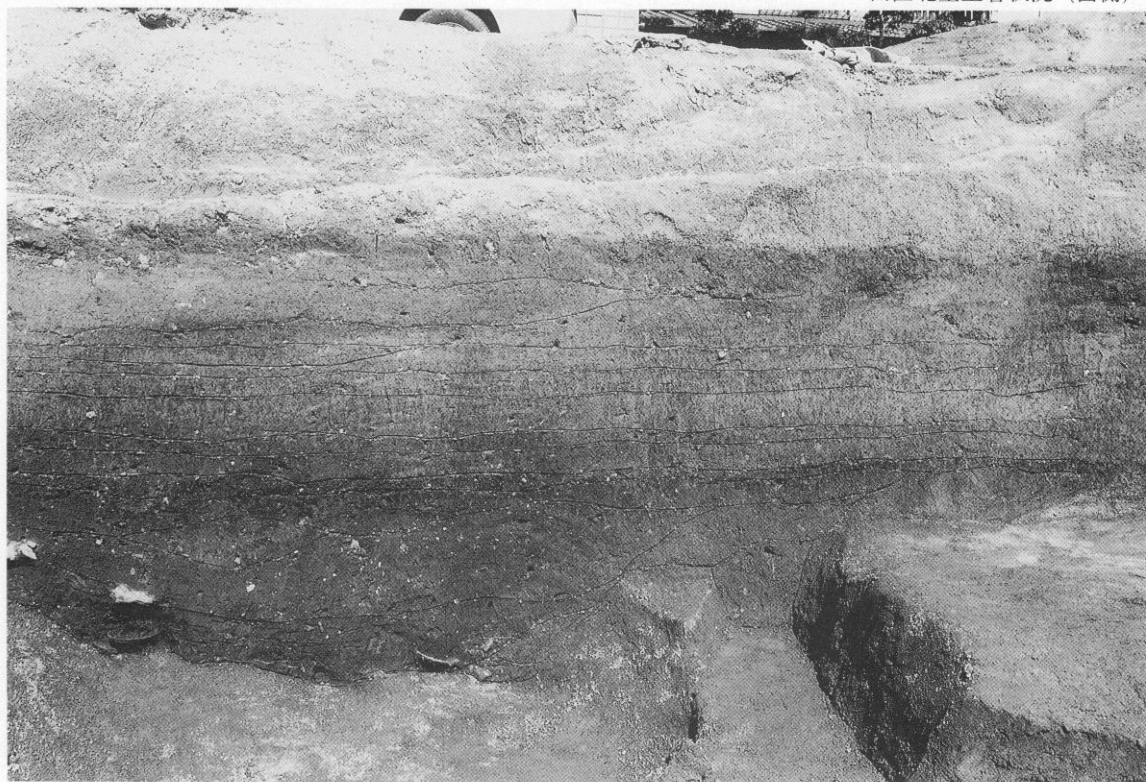
大宰府条坊跡第133次調査西区完掘状況（上が北）



大宰府条坊跡第133次調査東区完掘状況（西から）



西区北壁土層狀況（西側）



同上（東側）

Pla. 4



西区南壁土層狀況（西側）



同上（東側）



条133SD010埋土状況（南から）



条133SD010(手前)と条133SX020検出時（南東から）



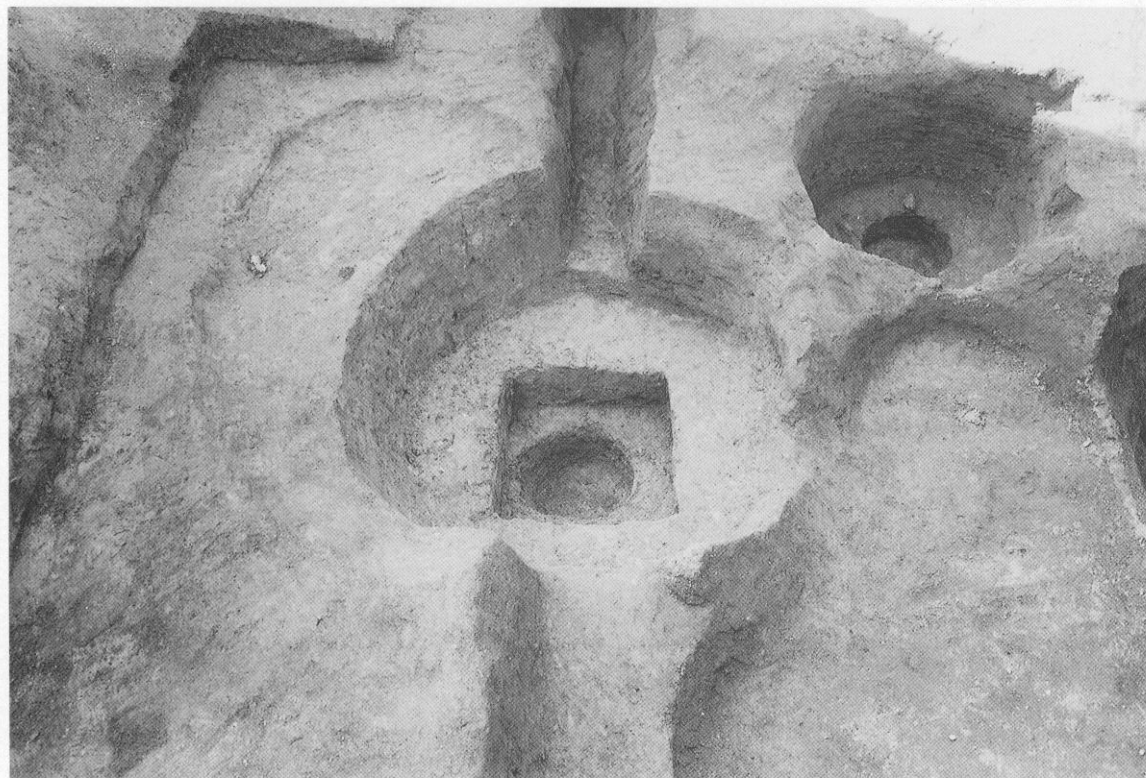
条133 SD015完掘状況（南から）



条133 SD015埋土状況（調査区南壁）



条133 SE035完掘状況（北から）



条133 SE040完掘状況（北から）

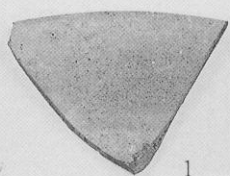


条133 SE045完掘状況（南から）



条133 SX005下層遺物出土状況（南から）

133SD010



1



製塩土器



133SD015



1



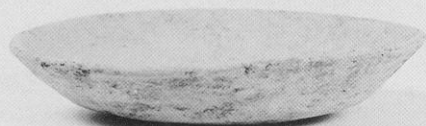
4



10



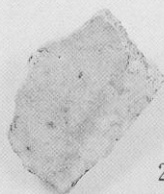
12



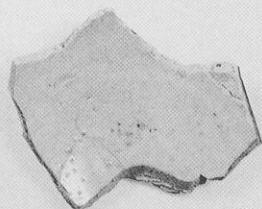
14



17



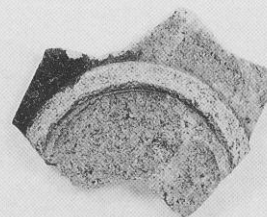
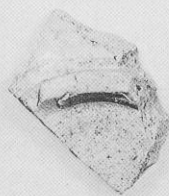
25



26

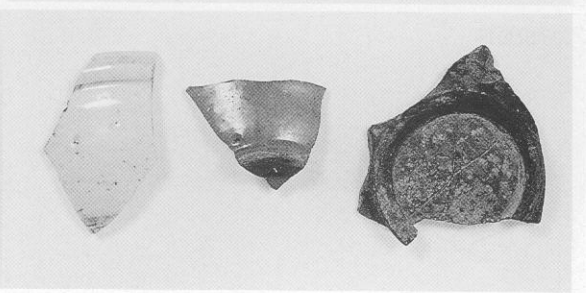
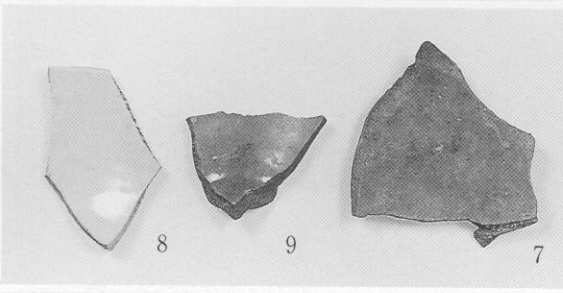


27

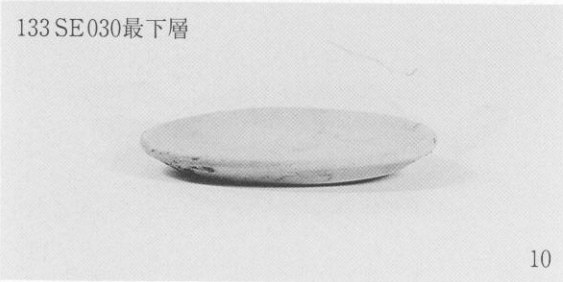


Pl.10

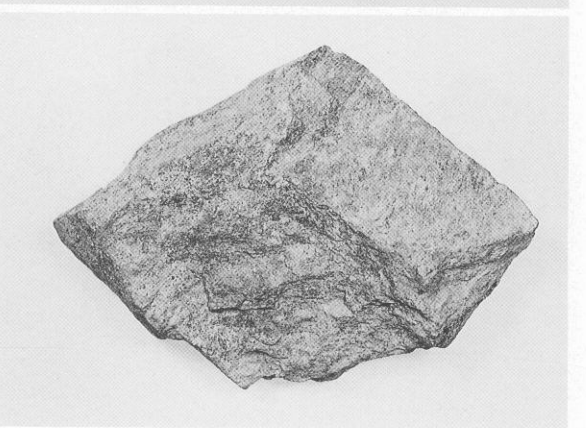
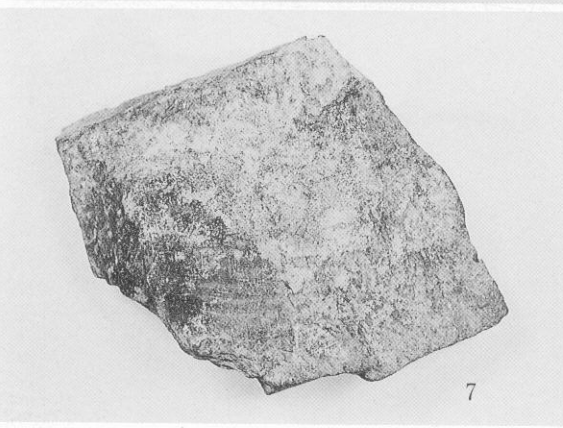
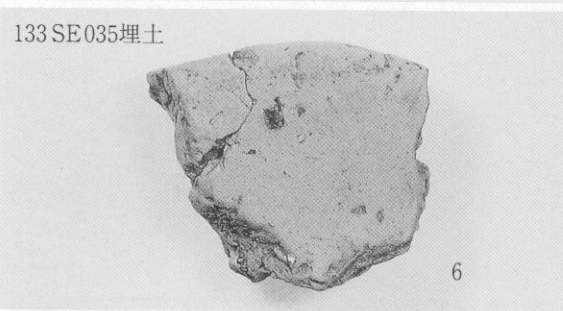
133 SE030埋土



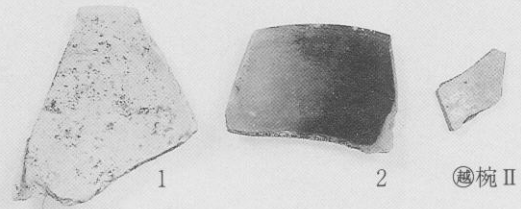
133 SE030最下層



133 SE035埋土



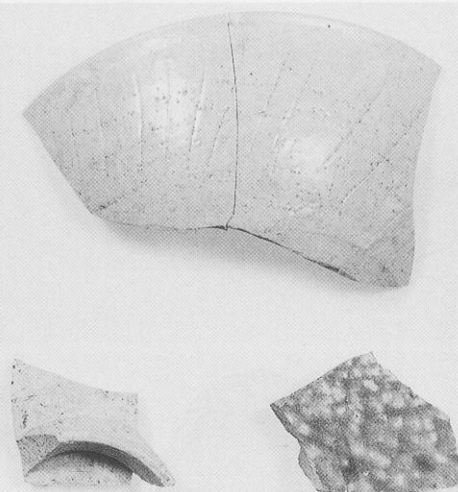
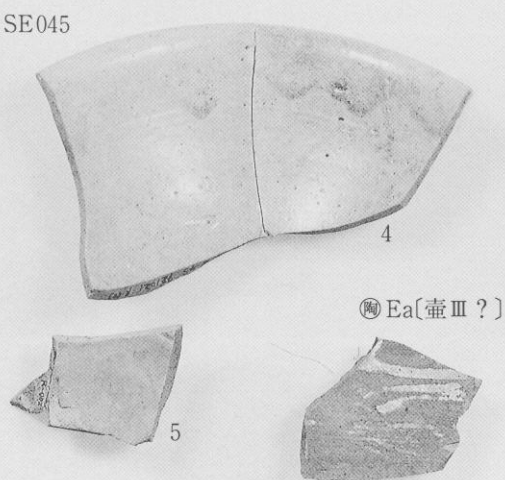
133 SE040灰色砂



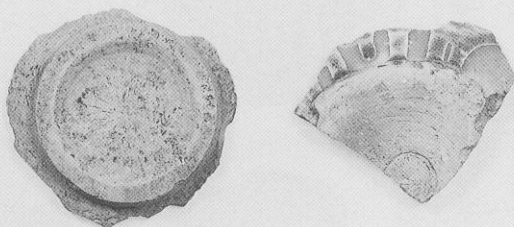
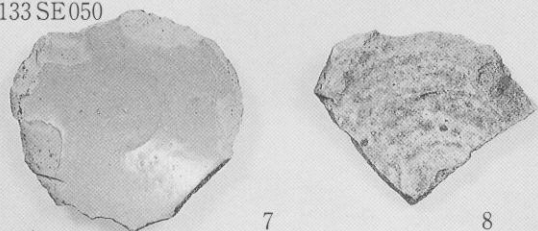
133 SE040最下層



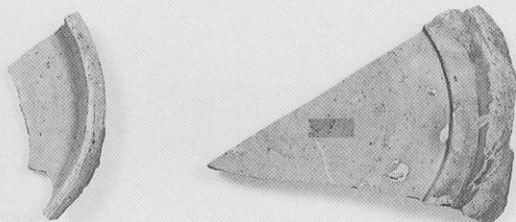
133 SE045



133 SE050



133 SK001

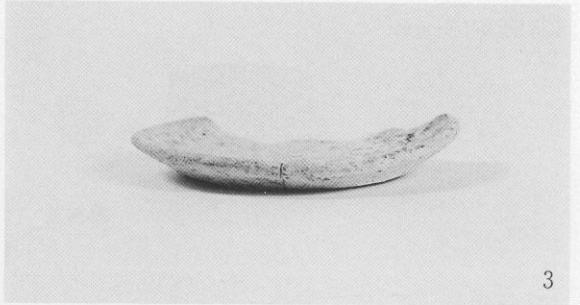


Pl.12

133 SX 005上層



2



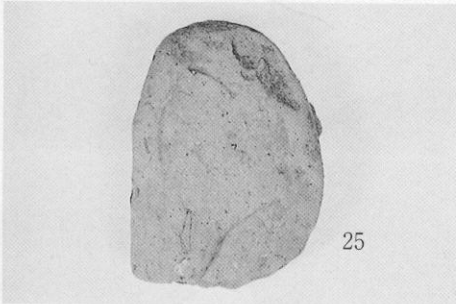
3



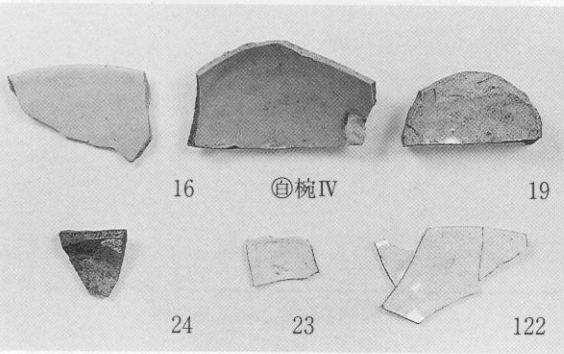
12



15



25



16

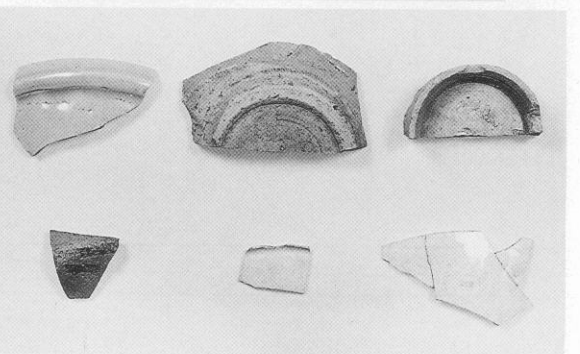
◎碗IV

19

24

23

122



133 SX 005中層



27



29



30



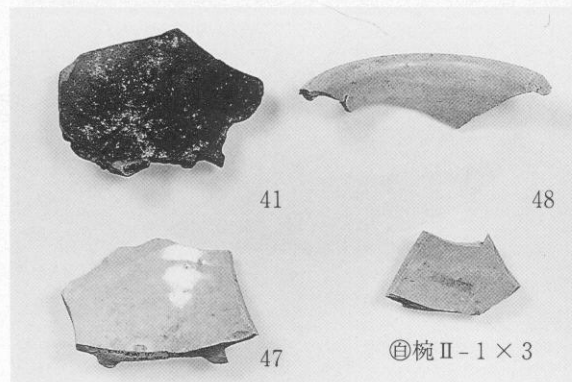
31



34



42

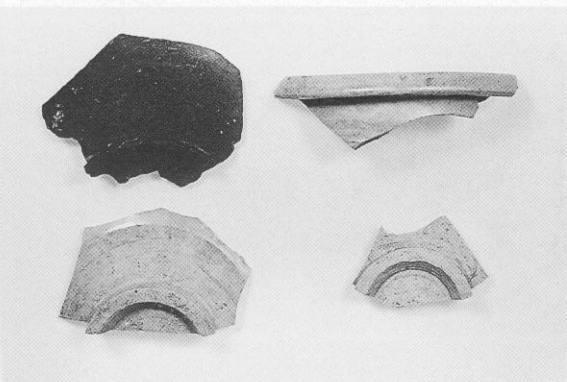


41

48

47

④碗Ⅱ-1×3



133 SX 005 下層



53



56



57



58

Pla.14



62



65



70



71



75



79



83



85



87



90



91



92



93



94



97



100



101



102

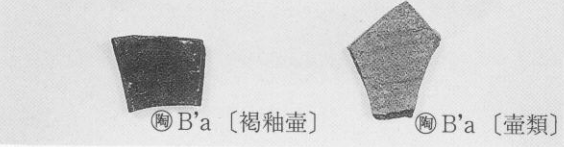
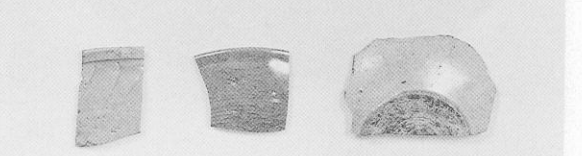
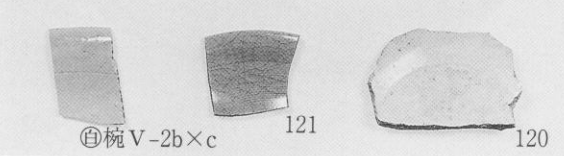
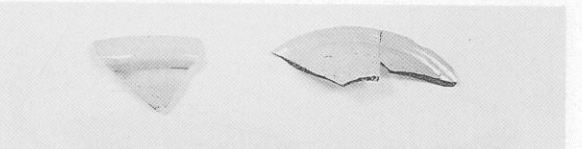


106

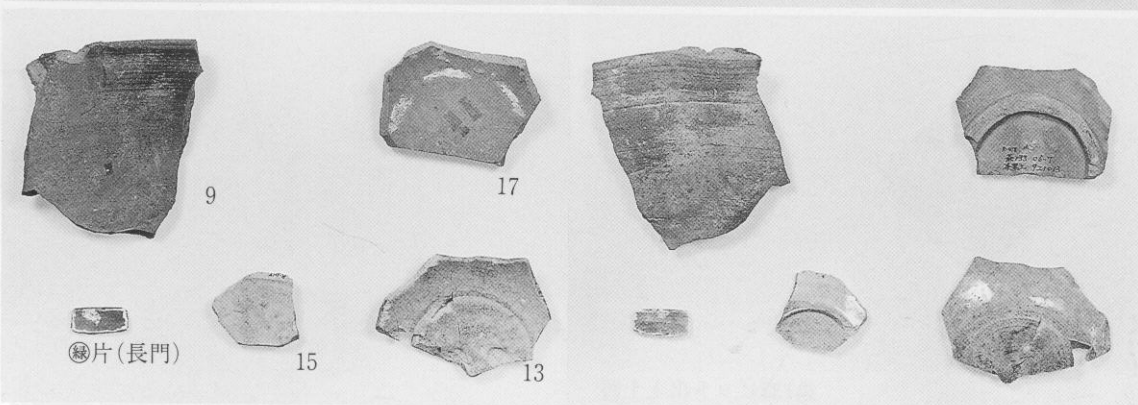
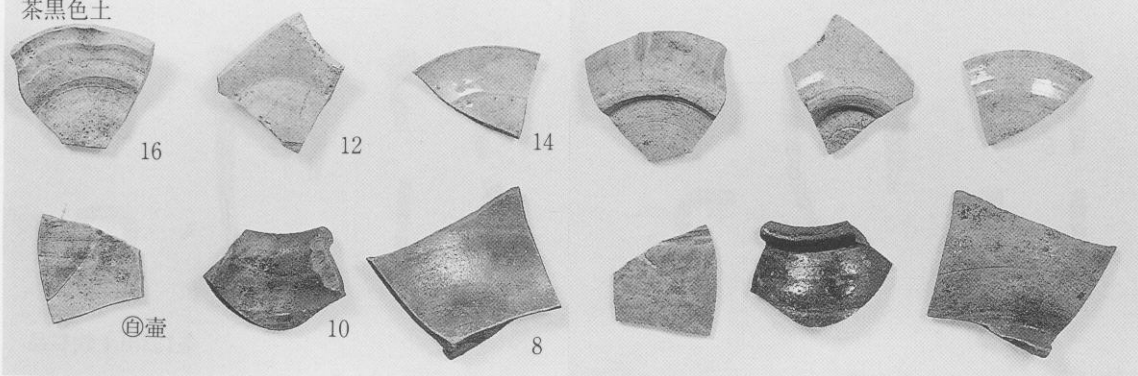


109

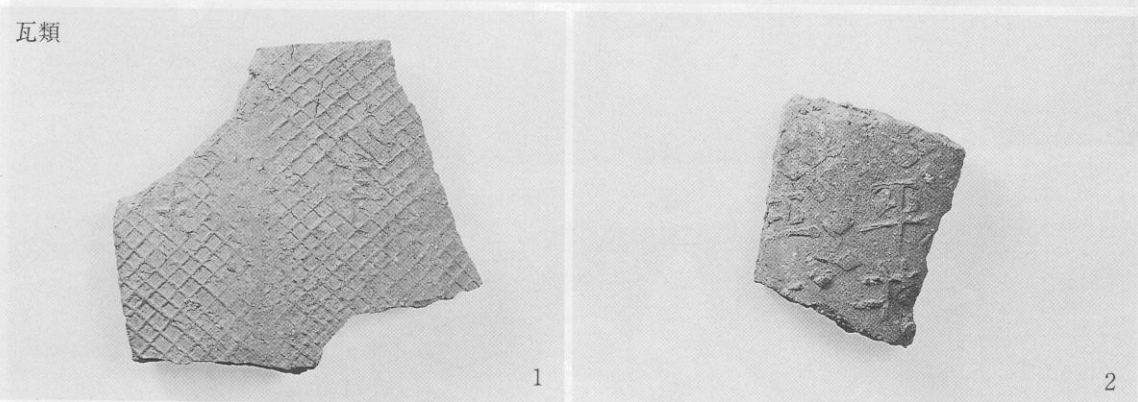
Pla.16



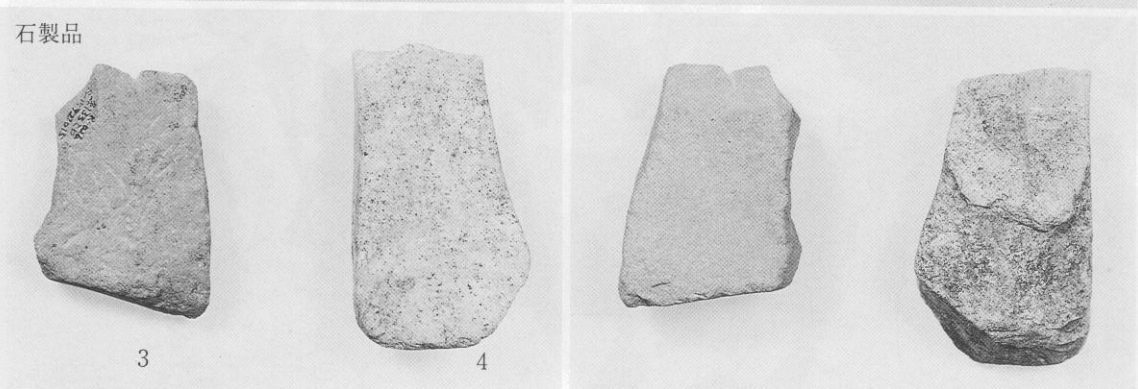
茶黑色土



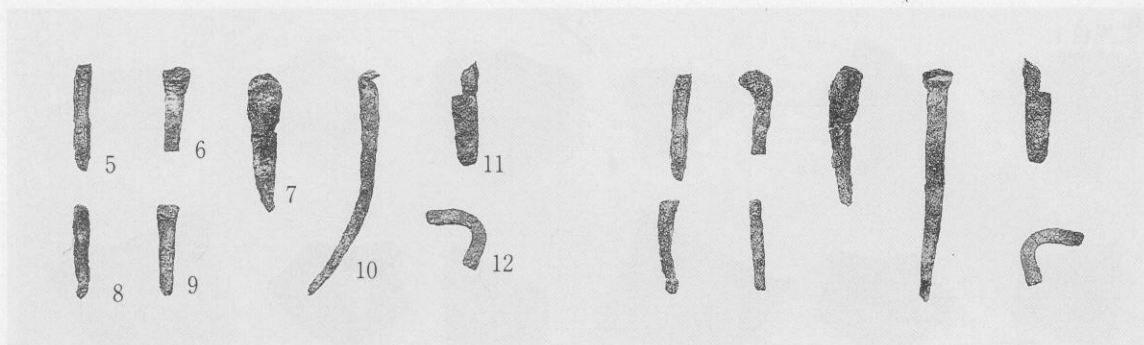
瓦類



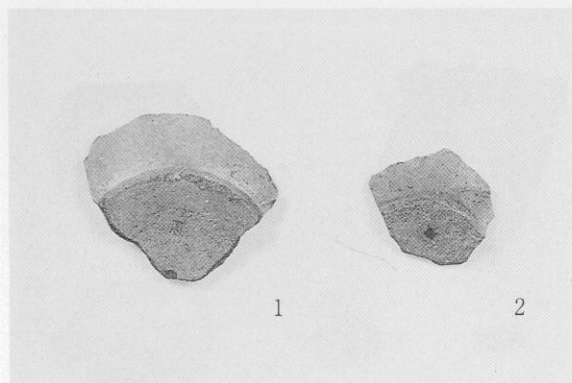
石製品



茶黑色土出土土器、条133出土瓦・石製品



条133出土鉄製品



条133ピット出土土器



条133調査作業風景

太宰府市の文化財 第29集

大宰府条坊跡Ⅷ

— 第133次調査 —

平成7年3月

編 集	太宰府市教育委員会
発 行	太宰府市観世音寺 1-1-1
印 刷	大道印刷株式会社
	春日市日の出町 6-23